

**天理大学 「フィリピン・プロジェクト06」
報告書**

A Report on "Philippine Project 06"



天理大学

地域文化研究センター

**International Center for Regional Studies
(ICRS)**

Tenri University

目次

概要.....	3
募集要項.....	4
参加者名簿.....	5
スケジュール.....	6
報告書刊行に寄せて.....	7
学長	橋本 武人..... 9
地域文化研究センター長	住原 則也..... 10
後援会長	江川 嘉忠..... 12
人間学部長	神田 秀雄..... 13
文学部長	飯島 吉晴..... 14
国際文化学部長	松尾 勇..... 15
体育学部長	湯浅 晃..... 16
天理教東本サンタローサ出張所長	上田 和興..... 17
体育学部教授	
(地域文化研究センター兼任研究員)	近藤 雄二..... 18
国際文化学部助教授	
(地域文化研究センター専任研究員)	澤山 利広..... 20
第一部 (参加者感想文)	21
第二部 (活動記録)	39
派遣前研修、結団式&フィリピン滞在日記.....	41
食事班レポート.....	58
スポーツ班レポート.....	60
文化班レポート.....	62
ホームステイレポート.....	63
“Home of Joy” レポート.....	64
第三部 (資料編)	65
天理教用語の説明.....	67
プロジェクト関連新聞記事など.....	69
編集後記.....	72

「フィリピン・プロジェクト 06」 概要

天理大学地域文化研究センターが主催した「フィリピン・プロジェクト 06」は、8月14日～20日の日程でフィリピン共和国サンタローサを拠点に活動し、最終日前日より首都マニラでの活動を行った。

今回の主な活動は、サンタローサ市内の学校で日本の運動会を再現したスポーツ交流会、日本文化である折り鶴や紙芝居を伝えようという文化交流会を実施した。マニラではマザー・テレサの思想と行動に基づいた施設である“Home of Joy”で、子どもたちの配膳のお手伝いをさせて頂いた。どの活動も今までに経験したことのないもの、味わったことのない感動があった。今回の参加者である、本学生9名、大学外から2名、引率者2名は、プロジェクトの目的であるボランティア活動、ホームステイ、そして天理教の海外活動の一端を見る機会を通じて、国際協力のあり方を考え、帰国後それぞれがどんな活動に取り組んでいけるか、今後どんな活動が必要なのかを考えるきっかけを得たと確信する。



天理大学地域文化研究センター (ICRS)
「国際参加プログラム」推進部門
フィリピン・プロジェクト 06
募集要項

本プロジェクトは、フィリピンでのボランティア活動とホームステイを通じて、国際協力のあり方を考え、帰国後の諸活動の契機とすることを目的としています。

1. 場 所： フィリピン共和国ルソン島ラグーナ州サンタローサ市並びにマニラ首都圏
2. 期 間： 8月14日(月)～20日(日)〔6泊7日〕
3. 参加費： 6万5千円(航空券代金、宿泊費、食費、比国内移動費などを含む)
※天理大現役学生にかかるその他の経費については、天理大学後援会からの参加補助金が支給されます(金額未定)。
4. 募集人員： 10名程度(最低催行人員4名)
5. 募集資格： 当プロジェクトの趣旨に賛同いただける方(天理大学学生以外の方の参加を歓迎します)
6. スケジュール(予定)：

8月 14日(月)	関西国際空港集合→マニラ国際空港→サンタローサ
15日(火)	
	ひのきしん&ボランティア活動、ホームステイ
18日(金)	さよならパーティー
19日(土)	サンタローサ→マニラ首都圏
20日(日)	マニラ国際空港(解散)→関西国際空港
7. 申し込み： 7月5日(水)午後5時必着で「申込書」をICRSにFAXあるいは郵送(持参可)して下さい。申込書の内容をメールで送信いただいても結構です(書式は問いません)。
8. 参加者の決定： 応募者が多数の場合は、申込書を参考に選抜します。結果は原則e-mailで通知します。
9. 参加手続き・注意事項など：
 - a. 団体行動における協調性と、アジアの庶民生活に馴染むことができる順応性が求められます。
 - b. 参加者は、7月20日(木)までに参加費を所定の方法で納めてください。
 - c. パスポート取得費、日本国内交通費、海外旅行傷害保険などの費用は、参加者負担とします。
 - d. 海外旅行傷害保険(死亡・後遺障害1千万円以上、治療200万円以上)への加入は必須です。クレジットカードに付帯されている保険以外に別途加入して下さい。
 - e. 覚書を交わします。覚書の各条項に違反する行為があった場合、参加資格を取り消すことがあります。また、未成年者は同意書の提出が求められます。
 - f. 天理大学生は派遣前研修と作業への参加が義務付けられます。アルバイトをはじめ万障繰り合わせて必ず出席して下さい。
 - g. 出発前の企画段階からの積極的な参画が望まれます。
 - h. 国際情勢の影響により事業を中止する場合がありますので、予めご了承ください。
 - i. 派遣後にはレポートの提出、および文集(報告書)の作成が義務付けられています。
 - j. 8月20日以降のフィリピン滞在は個人の責任です。

参加者名簿

No.	担当	氏名	フリガナ	所属
①	スポーツ	坂上 典明	サカガミ ノリアキ	国際文化学部欧米学科英米語コース4年
②	文化	竹平 弥生子	タケヒラ ミオコ	人間学部人間関係学科臨床心理学専攻4年
③	スポーツ	畑 公依子	ハタ キエコ	国際文化学部アジア学科タイ語コース4年
④	文化	半田 美津子	ハンダ ミツコ	国際文化学部欧米学科英米語コース4年
⑤	料理	三島 千佳	ミシマ チカ	国際文化学部欧米学科英米語コース4年
⑥	スポーツ	水谷 正孝	ミズタニ マサタカ	国際文化学部欧米学科英米語コース4年
⑦	文化	池戸 大津子	イケド タツコ	国際文化学部欧米学科英米語コース3年
⑧	料理	井上 雅之	イノウエ マサユキ	国際文化学部欧米学科英米語コース3年
⑨	文化	村田 明彦	ムラタ アキヒコ	国際文化学部欧米学科英米語コース3年
⑩	スポーツ	千歳 章倫	チトセ アキノリ	天理時報社
⑪	料理	椋野 和子	ムクノ カズコ	天理高等学校第二部介護福祉科

引率者名簿

氏名	フリガナ	所属
近藤 雄二	コンドウ ユウジ	体育学部教授 (地域文化研究センター兼任研究員)
澤山 利広	サワヤマ トシヒロ	国際文化学部助教授 (地域文化研究センター専任研究員)

フィリピン・プロジェクト 06スケジュール

日 時	内 容
8/14 (月)	(機本発 6:22 → 関西空港着 7:25) 8:00 関西国際空港 Gカウンター前に集合 10:05 関西国際空港発 (CX503) → 香港 (CX919) → 16:35 マニラ国際空港着 17:00 マニラ空港駐車場 (バスで移動) → 18:30 天理教東本大教会サンタローサ出張所 (TSMS) 着 19:00 ホストファミリー (HF) 宅へ
8/15 (火)	8:00 朝勤 (朝食は HF) オリエンテーション、にをいがけ、ひのきしん (トライシクル乗場の清掃など) 10:00 サンタローサ市役所表敬訪問 12:00 昼食 13:00 打ち合わせ (スポーツ班: Science & Technology High School、交流班: Central 2 Elem. School) 17:00 夕勤 18:00 各自 HF 宅へ
8/16 (水)	8:00 朝勤 (朝食は HF) にをいがけ、ひのきしん (トライシクル乗場の清掃など) 12:00 昼食 13:30 STHS での交流 (1クラス約 35 人 (女子 10 名): 主にスポーツ交流+学校見学、文化交流) 17:00 夕勤 18:00 各自 HF 宅へ
8/17 (木)	8:00 朝勤 (朝食は HF) にをいがけ、ひのきしん (トライシクル乗場の清掃など) 12:00 昼食 13:30 C2ES での交流 (1クラス 50 人: 主に文化交流 (折り紙、凧づくりなど)) 17:00 夕勤 18:00 各自 HF 宅へ
8/18 (金)	8:00 朝勤 (朝食は HF) にをいがけ、ひのきしん (トライシクル乗場の清掃など) 12:00 昼食 13:30 さよならパーティー準備 17:00 夕勤 18:00 さよならパーティー (HF を招待) 21:00 各自 HF 宅へ
8/19 (土)	8:00 朝勤 (朝食は HF) Home of Joy 訪問準備 9:00 サンタローサ (バスで移動) → 天理教フィリピン出張所 (マニラ) 12:00 昼食 13:30 ホテル着 15:00 Home of Joy 訪問 (孤児院、障害児施設での食事介助など) (~17:30) 19:00 夕食
8/20 (日)	10:00 ホテル発 (バスで移動) 10:30 マニラ国際空港 12:30 マニラ国際空港 (CX900) → 香港 (CX502) → 21:00 関西国際空港着 (解散)

「フィリピン・プロジェクト06」

報告書刊行に寄せて

「フィリピン・プロジェクト06」報告書刊行に寄せて

学長 橋本 武人

天理大学の「国際参加プロジェクト」は、建学の精神の一環として唱導する「他者への献身」を国際的なスケールで実践し、よって本学の教育目標として掲げる宗教性と国際性を同時に涵養する教育課程である。

本プロジェクトは、2001年大震災に見舞われたインド西部地区への災害救援活動として始められた。これが3年間続けられた後、2004年にはフィリピンへ、2005年には中華人民共和国へと活動の舞台を移して実施された。第6回を数える本年は、地震と津波により大きな被害を蒙ったインドネシアのニアス島を中心に展開されるとともに、「フィリピン・プロジェクト06」と称する別動隊の活動がつけ加えられた。本書はその別動隊の活動報告書である。

もともと災害救援として始まったとはいえ、このプログラムは義援金や援助物資を運び届ける類いのものでない。最初のインドでは、貯水のための河川堰建設や土囊のハウスの建築など、現地の人々が自立復興へ向けて必要とするものを、ともに汗して建設するところに特色をもたせたもので、この基本姿勢は終始一貫している。

今回の「フィリピン・プロジェクト06」は、2004年に恵まれない小学校の児童たちにリコーダーを贈呈して実際に演奏する技術を指導した活動を引き継ぐものである。先回馴染みになったサンタローサの学生、生徒や住民たちとの交流だけでなく、天理教東本サンタローサ出張所ならびにフィリピン出張所のご協力を得て、「ひのきしん」という教学協働の新しい活動を展開したところに特色があった。言葉も違えば習慣も異なる異文化圏の人々との共同作業、ホームステイ先の家族との直接的な交わりを通して、学生たちは国際性を養う上で多くのことを学び、現地の人々に喜んでいただく他者への献身を通して、人をたすける心という宗教的な心性の涵養も可能になる。また、貧しくとも純真で屈託のない子どもたちとの交わりは、何かにつけて恵まれている自己自身を省みる機会となり、物質文明が置き去りにしてきた心の豊かさを取り戻す契機ともなる。

今はまだ渡航先も限られ、参加人員数にも制限があるが、おいおい活動の範囲を世界の各地に広げて、一人でも多くの学生諸君が参加できるようにしていきたい。終わりに、この度の「フィリピン・プロジェクト06」の計画実施に当たって、絶大なご支援ご協力を賜った関係機関各位のご厚情に対して、深甚なる敬意と謝意を表します。

歴史を刻み込むということ

地域文化研究センター長 住原 則也

「国際参加プロジェクト」というのは、教育の場で、どのように国際協力・国際交流ができるのか、また、国際協力がどのように教育（知育・徳育・体育）に活かしているのかを、実践を通して学ぼうとする、本学を特徴づける一つの活動となっています。第1回目の開始は2001年であり、歴史はまだ浅いものですが、このようなプロジェクトを天理大学が行う理由は大学の創立時からの精神に根源を見出しうるものです。つまり橋本武人学長が常々仰る通り、本学の伝統である、「他者への献身」と言い換えることのできる宗教性と、もう一つは語学を身につけ海外に雄飛する国際性の双方を、このプロジェクトは併せ持っているからです。本学の伝統的精神の延長線上に位置しているものと言えます。

「国際参加プロジェクト」の始まりからの歴史を紐解けば、2001年1月26日インド・グジャラート州で大地震が発生したことを受け、同年8月1日から15日にかけて、井上昭夫おやさと研究所長をはじめとした有志の教員と学生が、被災地支援のためのチェックダムとボンガ（土嚢シェルター）などを造ったことが第1回目の活動です。次年度2002年4月に地域文化研究センター（井上昭夫教授が2002年4月から2006年3月まで初代センター長）が、プロジェクトを主幹する機関としてオープンし、第2回目（2003年3月5日～15日）の活動として、同じくインドで、チェックダムと図書館用のボンガ及び日本庭園などを増築しました。したがって、第2回目から、本センターがプロジェクトを主幹し始めたこととなります。更に第3回目（2004年2月21日～3月5日）もインドで前年度同様の活動を行っています。

第4回目は、場所を変え、1991年6月に500年ぶりの大噴火を起こしたフィリピンのピナツボ火山の被災地の小学校で、2004年8月4日～16日にかけて、リコーダーの指導などの活動を行っています。翌年の第5回目（2005年8月16日～27日）は、中国・陝西省において植林活動などに従事しています。

以上、第1回目から5回目までの、参加学生数は、のべ58名を数えています。

さて、6年目を迎えた今年度（2006年度）は、歴史の新しい1ページを付け加えることになりました。というのも、「国際参加プロジェクト」の2つの意味で新しい側面が付加されたからです。2つの新しい側面とは、1つは、今年度のプロジェクトが、例年のようなセンター独自の企画立案のみで実施されるのではなく、学内教職員と学生の有志によって立ち上げられた「ニアス島等復興支援委員会」からの要請を受ける形で行われたということです。つまり、2004年12月26日に起きたスマトラ沖大地震・津波とそれに続く2005年3月のスマトラでの更なる地震によって甚大なる被害を被ったインドネシアやタイなど、本学にゆかり深い地域への支援の気運が学内に沸き上がったことが、今年度のプロジェクトに特別の色合いを付けることになったわけです。参加希望学生も例年以上に多く、2度

の審査の結果、17名の学生が参加することになりました。

もう1つの新しい動きは、社会学連携事業としての推進です。プロジェクトが、教育の一環である、という位置づけに変わりはないとしても、国際協力・交流活動が、大学構成員のみで行われるより、大学の立地するコミュニティーへの面としての広がりを持つことで、地域の一員としての大学の位置づけを明確化し、参加学生も、技術や知識や責任感を持った地域の社会人と活動を共にすることで、より多角的な学習ができるものと考えます。そのような活動を行う好適な場所として、天理教の海外拠点もあるフィリピン・サンタローサ市が選ばれ、「フィリピン・プロジェクト06」と命名されて、2名の社会人と9名の学生の参加により、企画通り立派に活動を終了することができました。次年度以降も継続予定です。フィリピンでの活動の、これから続く歴史の最初のページが記された年と言えるでしょう。

そもそも、本センターが推進する「国際参加プロジェクト」とは、出かけてゆく現地での2週間足らずの活動だけを指すのではなく、事前の研修と、帰国後の記録のまとめ、という一連の全工程を指しています。事前研修では、週一度ペースで約10週間かけて準備を行います。帰国後は、また何週間もかけて記録文集を作成することで、活動の成果を振り返ることになります。単に、活動の記録を残すのではなく、歴史を刻み込んでいくものと理解しています。私は、プロジェクトの全工程（事前研修、現地活動、記録文集）を三段跳びになぞらえて、ホップ・ステップ・ジャンプと呼んでいます。三段まで飛びきること、参加学生が卒業後社会人として活躍するときになっても、このプロジェクトで学んだことが長く活かされるものと信じています。

「国際参加プロジェクト」は全学に開かれた活動であり、本センターの一存や、センターメンバーだけで推進できているものではありません。全学からのご協力・ご理解をいただいて初めて実現できるものであることは言うまでもありません。学内のこれまでの幾多の教職員の方々の暖かいご協力にこの場を借りまして、厚く感謝申し上げます。また今後とも変わらぬご支援をよろしくお願い申し上げます。

また末尾になりましたが、学内だけではなく、後援会からも多大なご理解・ご支援をいただいていますこと、あらためて厚くお礼申し上げます。

「フィリピン・プロジェクト 06」 報告書刊行に寄せて

後援会長 江川 嘉忠

ここ数年、自然による猛威は地球上を駆け巡り、特に経済的・社会的な弱者が多い発展途上地域での被害は甚大なものとなっている。このような自然災害に対する国際社会の援助の手もかつてないほど迅速に、そして、大規模で展開するような様相を、私たちはテレビで目の当たりにしている。もちろん、こうした被害からの復興には多大な資金ばかりではなく、長い時間がかかることが予想される。しかし、世界のどこかで、あまりに多くの問題が日々勃発しているためか、数ヶ月もたつと、こうした被害地への支援は忘れがちになってしまうことも多々あるだろう。

天理大学地域文化研究センターにおける「国際参加プロジェクト」は、本年度で6回目を数えたが、今年は第4回目の実施地であったフィリピン共和国サンタローサ市において「フィリピン・プロジェクト 06」が実施された。天理教東本大教会サンタローサ出張所をはじめとする天理教関係者に協力を得て、「ひのきしん」に汗を流した。現地の小学校での文化交流、高等学校でのスポーツ交流、清掃活動などを通じた「教学協働」ができたのではなかろうか。観光旅行では体験できない草の根の人々との交流を通じて、きっと、個人個人に感じ入ることがあったに違いない。

第二次世界大戦後の日本は経済的な発展をとげ、今の大学生は豊かな生活を享受している。しかし、その一方で、日本の社会は、小・中学校で深刻化してきたいじめの問題に見られるように、人と人が人間的な関係を育んでいくのが難しくなっているようにすら感じる。このような日本から海外に飛び立つ学生たちは、仲間達と力を合わせて、ボランティア活動に従事していく中で、きっと大学の講義だけでは得られないすばらしい人とのつながりを発見できるに違いない。また、彼らは、異国の地で、日本とは異なる文化や人間のつながりを経験することで、人間として大きく成長していくのではないかと期待ができる。今後も、後援会は、天理大学の学生たちが単なる海外旅行では得られない体験をできるような機会をできる限り支援していきたいと考えている。

「フィリピン・プロジェクト 06」について思うこと

人間学部長 神田 秀雄

2006年度、天理大学は、インドネシア・ニアス島を対象地とした企画に加えて、フィリピン・サンタローサ市でも海外プロジェクトを実施した。本学が同地でプロジェクトを展開したのは、2004年度に続いてこれが2度目である。

フィリピンと聞いてまず思い出すのは、私の大学の後輩にあたる韓国人で、現在、韓国の大学教授になっている人の話である。留学生として来日した彼は、まず日本語習得の目的で在学した東京外国語大学で、文化人類学の先生に誘われてフィリピンにわたり、約1年ほどをフィリピンで過ごしたのだという。近代化の推進を当然のことと受け止めている日本や韓国の社会状況に深い疑問を抱いていた彼は、人々がのんびりと、それでいて生き生きと暮らしているフィリピンに大きな刺激、というよりはショックを受けたらしく、いまでもしばしばその話を聞かせてくれる。

ところで、昨年あたりにやや流行ったかもしれない言葉を使えば、今日の日本社会では、日常生活がほとんど「想定内」のことがらで過ぎてゆき、場合によっては危険もともなうような「想定外」のできごとに出会うことは、よほど意識的に求めようとしないかぎり難しくなっている。そのことを念頭に置くと、今回の「フィリピン・プロジェクト 06」に参加した学生諸君が天理大学広報や奈良新聞に寄せている声（感想）は、日本の日常に埋没していたのでは到底発しえない声だと思う。

「少子高齢化」の危機が声高に叫ばれている今日、日本社会は海外からの労働力に大きく依存しながらその再生産を維持・実現していると言ってよく、フィリピンはそうした労働力供給源の1つとして期待されていると言えよう。しかし、そうした日本社会側のかなり勝手とも言える都合からではなく、人間という存在が抱える苦しみや喜び、感動といったものを改めて教えてくれる相手として、われわれはフィリピンの社会を捉え、そこから多くを学ぶべきなのではないだろうか。本誌に掲載されている学生諸君や関係者の体験談を導きとして、私もそのような学習を自らの大きな課題としていきたい。

「フィリピン・プロジェクト 06」 報告書刊行に寄せて

文学部長 飯島 吉晴

「国際参加プロジェクト」は、「他者への献身」という建学の精神を国際的な場において実践するという教育プログラムで、地域文化センターが中心となって全学の学生対象に実施してきた。今夏は、さらにその発展形として「フィリピン・プロジェクト 06」が 2004 年の「国際参加プロジェクト」と同じサンタローサ市とマニラ首都圏で実施され、大きな成果をあげて全員無事に帰国し、今回その活動報告書が刊行される運びになったことは喜びにたえません。今回の活動では、天理教サンタローサ出張所の先生方に同行しての「ひのきしん」のほか、地元の小学校での折り紙交流、高校とのスポーツ交流、さらにマニラではマザーテレサ施設での孤児・障害児への食事介助が実施され、目に見えない多くの財産が参加学生のこころに築かれたことと思います。

本学では、常日頃から「ひのきしん」デーなどの活動を通じて建学の精神を実践しており、学会等の開催での学生の献身的な奉仕活動は、他大学の関係者から注目され、ほめられることが少なくありません。

養老孟司氏は、『まともな人』（中公新書）のなかで、「座って机の前で学べることもたしかにある。しかし応用が利くということは『身についた』ことでしかありえない。教養教育がダメになったのも『身につく』ことがないからであろう。教養はまさに身につくもので、座って勉強しても教養にはならない。ただ勉強家になるだけである。（中略）なぜ身につかないか、それははっきりしている。情報化時代だからであろう。情報とは停まったもので、生きて動いている存在ではない。（中略）生きることは、再び取り返しがつかない時間を通してのことである。通過していく主体は、二度と同一の状態をとることはない。だからすべては一期一会なのである」と述べています。

この頃はあまり聞かなくなりましたが、「かわいい子には旅をさせよ」という諺がある。これはある意味で教育の核心をついている言葉ではないかと思われる。現在は、日本中どこへいっても都市化が進行し、昔に比べて生活もずっと豊かになり、明日食べる米がないといった半世紀あまり前には現実であった貧困は想像できなくなっている。その豊かさの代償として、自分の身体や全感覚をとぎすませて絶えず変化し動いている自然や現実世界と向き合うという経験は圧倒的に少なくなっている。現在の情報化社会とはまさしくこういった社会のことであり、学問はこの変化しない停まったものを整理する作業にほかならないのである。養老氏によれば、情報化社会の人が、教育が下得手なのは当然であり、「教育とはまさに生きて動いていく人間を扱うことだからである。子ども以上に変化の激しい人間はない」だという。さらに、「いま教育問題がやかましい。（中略）教育の根本はなにかというなら、話は簡単である。水と餌とねぐら、それを自分で探すようにさせる。そうすれば、アツという間に子どもは育つ」という。一定の豊かさを達成し、何事も安全第一となった現代社会では、教育の動機やインセンティブがなかなか見つけにくくなっている。ところが、無気力であった若者たちも、海外でのボランティア活動など自分が必要とされ、自分が人々の役に立つ存在であることに目覚めると、人が変わったかのような頼もしい存在に変身することが少なくない。いわば、今回の「フィリピン・プロジェクト 06」はその契機であり、現代版の「かわいい子には旅をさせよ」という諺なのである。

第6回「国際参加プロジェクト」ならびに 「フィリピン・プロジェクト06」を終えて

国際文化学部長・天理大学ニアス島等復興支援委員会委員長
松尾 勇

今夏実施されました第6回「国際参加プロジェクト」ならびに「フィリピン・プロジェクト06」が大きな成果を挙げて無事終了いたしましたことは、私たち天理大学にとってこの上ない喜びです。その間、両プロジェクト推進のための研修の企画・実施や参加者への指導に直接ご尽力くださいました教職員の方々には深甚なる謝意を表したいと存じます。

プロジェクト参加を通して学生の皆さんは、まことに得がたい貴重な経験をされました。現地へ赴き、現地の方々と交流することにより、国際協力や国際貢献ということに対して具体的なイメージを持つことができたのではないかと拝察いたします。ともに悲しみ、ともに喜ぶというとても大切な生き方の基礎を身につけられたことでしょう。

「国際参加プロジェクト」は、インドネシア・スマトラ島で行われました。2004年12月「インド洋大津波」と2005年3月「スマトラ沖地震」に起きた自然の猛威の前で私たちはただ呆然と立ちすくむしかありませんでした。そのような状況の中でわがインドネシア語コースとタイ語コースに所属する教員と学生が中心となっていち早く被災地の復興支援のために立ち上がりました。最愛の肉親を亡くすなど、想像を絶する被害を受けた現地の方々の心の痛みをわが心の痛みとして、寒風の吹きすさぶ中、また、酷暑の中を教職員・学生たちは街頭募金活動をいたしました。その輪が次第に広がり、多くの方々の真実をいただき、復興支援に寄与することができました。街頭募金に協力して下さった数多くの方々をはじめ天理大学の卒業生の方々、天理教海外部国際たすけあいネット、天理大学教職員、その他大勢の方々から尊い寄付を賜りました。まことにありがとうございました。心より御礼申し上げます。

当初の計画が順調に進んだ今、今後の継続的支援こそが大切であります。先ごろインドネシアのアチェよりルトフィー・アウニ氏を、メダンよりヨピ・マナル氏のお二方をお招きして国際シンポジウム「災害被災地復興支援活動と大学教育」を開催いたしました。これによって私たちは現地の状況に対する理解をさらに深めることができました。シンポジウムは、今後の計画をより確かなものとする契機となるとともに、天理大学が取り組んでおります国際協力プログラムのより一層の推進につながるものとなることと確信いたします。

「フィリピン・プロジェクト06」は、2年前の「国際参加プロジェクト」を引き継ぎ、天理教東本サンタローサ出張所ならびに天理教フィリピン出張所のご協力を得た活動でした。サンタローサの学校での文化・スポーツ交流や「ひのきしん」とどまらず、「教学協働」を標榜する観点から、天理教の先生方と「にをいがけ」に同行させていただき、草の根で暮らす人々の救いを求める声や喜びの声を聞くことができました。天理教だけではなくマニラでは基督教の福祉施設で障害を持つ子ども達に食事介助をする機会を得ました。これらの活動は本学の教育目標として掲げる宗教性と国際性を同時に涵養するプログラムであると評価できます。

また、「フィリピン・プロジェクト06」には、本学の学生に加え、社会人2名の参加を得ました。現地での様々な活動の充実は、社会人参加者による所が大きかったことが本報告書からもわかります。さらに「社会学連携」を充実し、本学の国際協力活動が発展することを願ってやみません。

報告書の刊行に寄せて

体育学部長 湯浅 晃

本年度、地域文化研究センターが企画されましたフィリピンならびにインドネシアでのプロジェクトが成功裡の内に無事終えられましたことを、先ずもってお祝い申し上げます。また、プロジェクトの企画・立案から現地での活動、学生指導の全般にわたってご尽力をされたセンター長をはじめセンター研究員に衷心より敬意を表します。

人類の共存・共栄の必要性が叫ばれて久しいにもかかわらず、現在でも国家間、民族間の争いが絶えません。また、国内においても親が子を殺し、子が親を殺すという殺伐たる状況が益々深刻さを増しています。本学は、「他者への献身」の心を核とした「天理スピリット」の体得を最も重要な教育目標として掲げています。他者への献身の心や態度は、私達が日々の生活する中で日常的に醸成されるべきものだと思います。しかしながら、本学の学生や教職員に対して、その大切さをアピールし浸透させるには本プロジェクトのような大学をあげての活動が必要であると思います。参加学生の感想文の一部を拝見させていただきましたが、それぞれの学生が見知らぬ国へ出向き、不安を抱えながらも懸命に活動し、さわやかな達成感をもって帰国した様子がよくわかりました。この経験は、学生達にとってかけがえのない思い出になるとともに、これからの人生の指針となり天理スピリットのすばらしさを社会に向けて発信してくれるものと思います。

今回のプロジェクトは、インドネシアにおいては地震災害の復興支援、またフィリピンにおいては現地の子供達との交流が主な活動内容であったと報告されております。そして2回のプロジェクトに、合わせて28名の本学学生が参加したと聞いております。私ども体育学部の学生は、これまで数名がこの「国際参加プロジェクト」に参加したに過ぎないと思います。体育学部の学生達は、ただ競技に勝つことだけを目標としている学生が多く、スポーツを通して人々と交流し、その中で新たな自己を発見し、自己を高めていくという姿勢が稀薄だと思っています。今後、スポーツや武道を介した国際交流をメインとするプロジェクトを、学部と地域文化研究センターとが協力して企画できれば、天理大学にまた一つの花が咲くのではないのでしょうか。

見果てぬ夢を追って

天理教東本サンタローサ出張所長 上田 和興

2004年に続いて本年再び学生諸君と社会人の方2名もご参加下さり、サンタローサにお迎えできたことを大変有難く思います。

ご覧頂いた通り小さな天理教の布教拠点で貧しい人々の街であります。私共の毎日は「おさづけ」の取り次ぎに病人宅を巡る事が主で、他のことにもご相談に乗ることがあります。月次祭にはいつもよりたくさんのお話を聞いて頂いて教理の伝道につとめています。又、「おつとめ」が中々難しいので時々主だった人々に集まって頂いて練習しているという状況です。ご存知のようにフィリピンの病院では、特に貧しい人々が受診するコミュニティーホスピタルでもお金を先に払って領収書を持っていかなければ治療を受けることが出来ません。従ってお金のない人は緊急の借金をしなければならない為、どうしても治療が遅れてしまいます。そんな中での「おさづけ」は、ある時には大きな存在です。こんな中でいつも残念に思えることは、もっと彼らの生活に関わることで出来ることがたくさんあるのに出来ないことです。キリスト教の病院や学校はその伝道の大きな力を発揮しました。私共が今そのような状況の中で小規模でもそれを実施することを夢見て頑張っています。しかし、その部分は企画としても少々足を踏み入れて下さっても良いと考えています。営利を目的にするにしてもその次の人々にも利益を還元することはきっと大切なことに違いありません。学生諸君は将来多くはそういう会社にお勤め下さるのでしょうか。志の根底にどこに行こうと周りにある人々の生活、幸せの為に何かさせて頂きたいという思いを宗教の大学におられる間に醸成して下さることを希望いたします。

最後に、又お越し頂けるチャンスがあるならばサンタローサの人々に日本文化のすばらしさを楽しく理解してもらい、学生諸君の求めるものをしっかりと相手に伝えることのできるようにして頂きたいと思います。サンタローサは学生諸君のお役に立つことに幸せを感じています。

教学協働をめざした2つめのプロジェクトの始動

その意義と活動地

体育学部教授（地域文化研究センター兼任研究員） 近藤 雄二

2004年に実施した第4回「国際参加プロジェクト」と同じ地域において「フィリピン・プロジェクト06」を実施しました。本報告書にその内容がまとめられています。また第6回となる「国際参加プロジェクト」は同月に日をずらしインドネシアで実施されました。

2001年にまずインドで開始された第1回目のプロジェクトからかかわってきた立場からは、この新しいプロジェクトの立ち上げには大きな意味を感じます。一つは、2つのプロジェクトを同時に実施できる力を持ち得るようになったということです。この6年間に本プロジェクトのために2人の専任教員が採用され、プロジェクトにあたって学部を横断した教員や留学生等の自発的、積極的な協力も得られるようになりました。なによりも学内の事務部門や後援会の支援体制等が整ってきました。本学の組織的な事業として、さらに発展させようとの強い意志が学内に根づいてきたことのあらわれを実感します。二つ目には、プロジェクトの活動地での教学協働の継続性をどのようなかたちで確保するのか、プロジェクトを実施するなかで生じてきた新たな課題に対する試みに着手できたことです。



「フィリピン・プロジェクト」は次年度以降も継続しますが、「国際参加プロジェクト」よりも天理教の海外布教に触れ、学ぶという側面を強くもたせています。東本大教会のサンタローサ出張所を拠点として、その日常活動に密接に関わり教学協働を長期的にすすめる可能性がもてます。そして三つ目には、今回はじめて教内関連施設内で参加を募り、二人の参加者を得たことです。これは社会に開かれたプロジェクト、社学連携プロジェクトとしての一步を踏み出したという意味があります。

本プロジェクトは、「国際参加プロジェクト」活動の渡航・訪問が危ぶまれた際の「代替地」であることも考慮されていますが、それ以上に前述の意図をもたせた活動の始動です。

このプロジェクトの実現には、2005年度の学内研究助成(代表者：澤山利広助教授)を得て、2005年6月と7月、2回にわたりフィリピンを訪問し、本プロジェクトの地盤づくりに専念する機会が得られたことが大きなものとなっています。その機会に、サンタローサ出張所では井戸汚染の情報を得たい意向があることも知り、今回のプロジェクトには大腸菌群検査等の簡易水質検査キット等を持参して、井戸等の生活水汚染の一端をフィードバックしてきました。

今後、継続して活動が行われる予定となるフィリピン共和国ラグーナ州サンタローサ市とこの地で布教、地域文化交流を進めている東本大教会サンタローサ出張所の活動を紹介しておきます。

マニラ市の南方約40Km、車で約1時間の地にラグーナ州サンタローサ市があります。自動車製造工場等の工場地帯があり人口増加も著しく、2004年に市に昇格したところです。歴史ある都市で旧市街には歴史的建造物が多く現存します。市中心部から徒歩20分の場所に天理教東本大教会サンタローサ出張所があり、上田和興所長以下1～2名が布教活動に従事しています。この地区は、シナルハンと呼ばれるバランガイ(行政単位の村に相当する言葉)でフィリピン最大のラグナ湖に面した村です。村民の多くは自営業、トライシクル(三輪バイク)やジプニー(ジープ型乗りあいバス)の運転で生計をたてています。水道整備はごく一部に留まり、その水道水も飲料用には適さず濾過水を購入しています。水道のない家庭が多数であり、井戸水が飲料を含む生活水として利用されている等、このシナルハンは貧困村といえます。

サンタローサ出張所は、この村を中心にして毎朝「おさづけ」に出かけます。今回のプロジェクトでは学生達も「おさづけ」に一緒に付き添い、布教とともに人々の生活に触れる機会をもちました。「おさづけ」のきっかけや相談事の多くが病気や身体不調であることが多く、上田所長らの仕事は、市内病院や各種機関への紹介や行政機関等との交渉等にまで広がった活動になっています。

実際、この村の死因上位は、肺炎、心疾患とともに、生活環境に密接に関連する結核と下痢症が続き、疾病上位もインフルエンザに続き、下痢症と結核が多くなっています。出張所が生活や疾病相談等のよろづ相談の機能を果たしている背景がみえてきます。多くの住民は、この出張所の活動に好意的であり、100を超える世帯が「おさづけ」を受けいれている現状があります。また、市中心部には、日本語や日本の学生達との交流を望む小学校や高度専門学校も多くあり、今回のプロジェクトで2004年の交流の成果が生きていることも確認できました。

草の根の布教と地域の献身活動をすすめ、その活動が現地で好意的に受けとめられている場所において、本学の「他者への献身」を理念とした教学協働の国際協力を展開していく可能性を見出すことが出来た第1回目の「フィリピン・プロジェクト06」になりました。

弱者への眼差しと生きる力

国際文化学部助教授（地域文化研究センター専任研究員） 澤山 利広

1. 眼差し

「フィリピン・プロジェクト06」は、これまでにインド、フィリピン、中国で実績を積んできた「国際参加プロジェクト」の新たな形として企画しました。「教学協働」に加え、本学のノウハウを社会に拓き、本学にない要素を吸収して、国内外の地域づくりへの寄与を意図する「社会学連携」を意識しています。この趣旨に沿って参加者を募り、本学学生と一般の方々にも参加いただきました。「国際参加プロジェクト」を国際協力への動機付けと位置づけているのに対し、「フィリピン・プロジェクト06」では一歩進んで、企画の大部分を参加者に委ねることとしました。2年前の「国際参加プロジェクト」で訪れたサンタローサ市において、天理教東本大教会サンタローサ出張所を拠点に活動を展開しました。文化交流、スポーツ交流、さよならパーティ担当の3グループに分かれ、交流先との打ち合わせやプログラムの作成もお願いしました。ある参加者は、「昭和30年代の日本の雰囲気」に浸り、また、ある人は「子ども達の目の輝きに魅了された」との感想を寄せています。マニラではわずか1日の滞在中に天理教フィリピン出張所で海外布教のご苦労と醍醐味をうかがい、マザーテレサのミッション施設である“Home of Joy”では、障害児への食事介助に従事することができました。天理教とは異なる宗教でありながら、弱者に注ぐ眼差しに共通のものを感じたのは、私だけではないかもしれません。

2. 生きる力

2003年の米アカデミー賞でオスカーを獲得した『千と千尋の神隠し』は、名前、すなわちアイデンティティの拠り所を奪われた少女が異界で暮らし、成長して現実社会に戻ってくるファンタジーです。主人公の少女は八百万の神に全身全霊で奉仕する中で、生きとし生けるものとの出会いや触れ合いを通じて「生きる力」を育んでいきます。異界と海外体験を同列で論じるわけではありませんが、青年期の異国での体験は新たな発見に富み、次のステップへの動機付けになることはよくあることです。

フィリピンでの「異界」体験のメイン・プログラムとして企画したのがホームステイです。日本の日常とは異なる生活環境の中で、英語も十分に通じず、特にサンタローサの方々の母語がタガログ語と聞けば、不安に駆られるのは当然です。ましてや一家庭に一人で滞在することを余儀なくされると、日本に帰りたいような気持ちになることも容易に察することができます。しかし、この種の不安は、進学、就職、結婚、引越などの旅立ちのステージにはつきもので、乗り越える度に自らの成長を確信できる「良性の不安」であったことに気づかされます。言葉で苦労したものの意外と意思の疎通ができたことに驚き、ホストファミリーとの触れ合いを通じて、改めて家族の大切さが身に沁みたことでしょう。気疲れして体調を崩したり、単調な食事が喉を通らなくても、サンタローサを離れる時に惜別の情にほだされたのなら、オリジナル多言語絵本『千羽鶴』を携えて、是非再訪して見て下さい。ホストファミリーはもちろん、隣近所の人々や子どもたちが熱烈歓迎してくれるに違いありません。今回の滞在では見えなかったものも見えるようになっているはずです。

「フィリピン・プロジェクト06」に参加したことで皆さんの「生きる力」がバージョンアップし、本学の掲げる「全人類が平和に暮らせるような、全く新しい地球文明の構築」にも思いを馳せてもらえるならうれしい限りです。

最後になりましたが、本プロジェクトにご協力いただいた皆様に深甚のお礼を申し上げます。

第一部 (参加者感想文)

①	坂上 典明	フィリピン紀行 2006.....	23
②	竹平 弥生子	竹平弥生子が～フィリピンで～出会ったあ～☆.....	24
③	畑 公依子	初体験♥×3.....	26
④	半田 美津子	フィリピンに行って.....	27
⑤	三島 千佳	体験しなくちゃわからない.....	28
⑥	水谷 正孝	第2の故郷、フィリピン.....	29
⑦	池戸 大津子	サラマッポ.....	30
⑧	井上 雅之	サラマッポ.....	31
⑨	村田 明彦	フィリピン滞在を通して.....	33
⑩	千歳 章倫	「フィリピン・プロジェクト06」に参加して.....	35
⑪	椋野 和子	ありがとう.....	37

フィリピン紀行 2006

① 坂上 典明



2年前にフィリピンでの「国際参加プロジェクト」に参加し、今回フィリピンの地を再び訪れることとなりました。今回の目的は何だ？と聞かれると、前回のようにリコーダーを教えるという定まったものがないように感じたけど、自分達で考えた、学校での学生との交流が大きな目的になったと思います。今回はさらに天理教における、「にをいがけ」にも同行させていただきました。私自身天理教の信仰者であり、現地の人が一生懸命「おさづけ」を取り次ぐ姿に感じるものは強かったです。そして、今回は最終日を除いて、ホームステイということで、最も身近にその国の習慣、文化を感じることでできるものであったと思います。

初日は、夜に各家庭に着き、そのままホームステイが始まったわけですが、2度目で慣れているから大丈夫だと楽観的に考えていたら、久々の食事の違いなどで最初はしんどさを感じてしまいました。だんだんと慣れて楽しめるようになり、その日のプログラムが終わって家に帰るのが楽しみでもありました。フィリピンもしくは、その周辺アジア諸国の一般家庭に滞在したことのある人であれば、1度は経験したことがあると思いますが、まず日本人がその家庭に入りびっくりすることはトイレの違いだと思います。フィリピンの一般家庭のトイレはいわゆる洋式トイレなのですが、便座がついていません。さらに手動水洗、つまりバケツに汲んできた水を勢いよくぶっかけるわけですから、座るにも座れず、お尻を浮かせて空中でするしかありません。しかし、なぜ便座がついていないのか？それについて調べてみると面白いことが分かりました。「割れちゃう」のです。フィリピンの大方の人たちの洋式便器の使い方に問題があって、つまり便器の両ふちに足を掛けて、洋式便器の上に乗るような姿勢でしゃがみ用をたすので、プラスチック製の便座はすぐに割れてしまうのです。そのために便座は外され、便器の上にしゃがみ込んで用をたすということでした。なかなか普通では考えられないですが。

私の今回の担当はスポーツ交流で、日本の運動会で行なわれる玉入れや大縄跳びなどで交流したわけですが、最後に行なったバスケットではフィリピンの1つの文化性を感じました。フィリピンでは最も人気のあるスポーツがバスケットで、当初イメージしていたのは、いろんな学生が軽いノリでバスケットを楽しむという感じでしたのですが、そこはさすがにフィリピンということで、その高校のクラブチームの生徒たちが出てきて、高校といっても日本では中学生くらいの年齢なのですが、自分達よりも大きくしっかりとした選手が登場してきたわけです。審判もつき、得点板も付けられ、さらには1クォーター10分で4クォーターやるということと言われ、さすがにそれはキツイということになって時間は減ったのですが、とにかく想定外の本格的な試合になってしまい、終わったときには全身汗びっちょびちょで瀕死状態でした。（それをきっかけに風邪を引くという末路をたどってしまいましたが）結果的にスポーツ交流は大成功でした。なによりも学生たちの笑顔がそれを物語っていたと思います。

今回の旅で改めて感じたことは、フィリピンの人の熱の熱さでした。「おさづけ」にしてもスポーツにしても、とにかく一生懸命取り組む姿に自分自身も情熱を持って物事に取り組もうと感ずることが出来ます。最後に2度までも参加させていただき、先生をはじめ後援して下さった方々に感謝したいと思います。ありがとうございました！

竹平弥生子が～フィリピンで～出会ったあ～☆

② 竹平 弥生子



奈良県生まれ、奈良県育ち。海のない県に生まれ、山に囲まれた大きな盆地で生きてきた。だからか？外に出たがる癖がある。大学生になるまでずっとクラブ活動に明け暮れていて、盆も正月もない、そんな生活を送っていた。旅行は中学に入って以来まったくと言って良いほどしていなかった。それに伴った反動形成か？？気がつけば、アルバイトをしてお金をためては、長期休みのたびにどこかに飛び出していた。

ついには1年大学を休んでふらふらと日本を飛び出していた。

これまで、国内外問わず結構いろんなところに行った。でも今回の体験は本当に新鮮なものだった。観光用に用意された車に乗るわけでもなく、きれいなホテルに泊まるわけでもなく、外国人向けに味付けられた料理を食べるわけでもなく。トライシクル（フィリピンの生活の足）に乗り、ホームステイ先のマザーが作るご飯を食べ・・・あっという間の1週間だった。

わたしにとってそんなフィリピンでの1週間の思い出は、たった1週間でも、この場では語りつくせないほどの膨大なものだ。その中でも、私が最も強く感じたこと。それは「人との出会いのかけがえのなさ」である。

フィリピンではホームステイをした。私のステイ先は結構裕福な家だったようで、私をいろんなところに引っ張り出してくれた。けれど家はトタン屋根に打ちっぱなしのコンクリートの壁。部屋と言うよりも、板で空間を区切っているだけのようなところだった。苦手な鳥もいっぱいいた・・・最初は「鳥・・・大丈夫か？」と心配だった。だけど、そんな心配も3分で吹っ飛んだ。気づいたら妹と同級生の10歳の女の子が「Ate Mioko」(ateとはタガログ語で“おねえちゃん”の意)と私にべったりだった。最初は恥ずかしかったのかなかなかしゃべってくれなかった中学生のおにいちゃんも、気づいたら「Ate Mioko, eat this!」と喋っているいろんなお菓子を持ってきてくれる。1日暑い中動き回ってくたくただったけど・・・なぜか子どもたちと遊ぶのはしんどくなかった。むしろ子どもたちと一緒に遊ぶことが私にとっての癒しだった。マザーとファザーもいろいろ気を使ってくれ、小学校でする予定だったタガログ語での紙芝居の台詞練習を夜遅くまで付き合ってくれた。そして、私と同じ年の長女は私にいろんなフィリピンを見せたいと言ってあっちこちいくプランを立ててくれた。

フィリピンでの活動の拠点となったサンタローサ出張所のみなさんにもたいへんお世話になり、またみなさんからいろんなことを学ばせていただいた。サンタローサ出張所とは、天理教の東本大教会の出張所であり、毎日布教活動をされている。天理大学の

学生であるので、もちろん天理教に関するある程度の知識はある。天理教徒の友人もたくさんいる。だけれども、間近で布教活動を目にするのは生まれて初めてのことである。「病気を治したい」と心から願い「おたすけ」をする人と、「治りたい」と心から願う「おたすけ」を受ける人。この二人の間にはコトバに出来ない「気持ち」があり、それが二人の心の支えとなっているのかもしれない。そんなことを思いながら「にをいがけ」について行かせていただいて、自分の学んでいる心理学にも通ずるような感じを覚えた。すごく新鮮な気持ちになった。たまたま出会った人たちだけど、その人を心から助けたいと思うこと、思えることはすごいことだと思った。改めて自分の学んでいる心理学について、また宗教について考えさせられた。

フィリピンでは、いろんな活動を通して、本当にいろんな人と出会った。交流をさせていただいたサンタローサ科学技術高校の生徒さんや先生方、真剣に私たちの紙芝居をきいてくれ、一緒になって鶴を折り、可愛いダンスを披露してくれた小学生や先生方、シティホール周辺の清掃活動をしていたとき、はなしかけてきたおじさん、“Home of Joy”で話したボランティアに来ていた女性のオフィスワーカーの方。本当にここでは書ききれないほどの出会いがあり、別れがあった。

そして、この「かけがえのない出会い」はなにもフィリピンで出会った人たちだけじゃない。一緒に参加したメンバーとの出会いもそうである。私以外の他の学生メンバーは国際文化学部で、もしこのプロジェクトに参加していなかったら、私はこの人たちと一言も話すことなく卒業していただろう。また、社会人の方との出会いも私にとっては本当に大きな財産となった。こんな機会でもなければ、社会人の方と一緒に過ごすことなんてなかっただろう。

フィリピンでの活動は、フィリピンの人のために何かするという目的で行ったのだが……。私にとってそれは、今まで知らなかった世界で、今まで知らなかった自分を見つめ直すいい機会になったように思う。

「このまま卒業してええんかな？」そんなことをふと思った4月。残り1年。進路のことを考えると胃がきりきりするし、時間もない。最初はインドネシアに行こうとしていて、期間的な面、それまでの準備等を理由に一度は「国際参加プロジェクト」への参加はあきらめた。でも、「ええんか？ええんか？」と頭の中でぐるぐる考える。「やっぱり残りの大学生活、今しかできないことをしよう！」そう思って飛び込んだ。「4回生のこの時期に参加？」と悩んではいたものの、今となっては参加して本当によかったと思う。フィリピンでの活動を通して出会った人たち。その人たちから学んだ多くのこと。ただの旅行で味わえない、いろんなことを自分のものにし、さらに新たな自分とも出会ったような気がする。

初体験♥×3

③ 畑 公依子



I wish la la... 君が笑えば 世界中がみんな happy なんだ♪♪

私の中で勝手に決めた「フィリピン・プロジェクト06」のテーマソング♪ フィリピンに滞在している間、そして帰ってきてからも私の頭の中ではずっとグルグルとこの曲がリピートされていました。一週間のさまざまな体験の中で「笑顔」がもつ大きな力に気づくことができました。

今回のフィリピンプロジェクトの参加をきっかけに、私は3つの初体験をしました。

1つ目は、一人きりでのホームステイです。今までに海外旅行やホームステイの経験はありましたが、いつも隣に誰か通訳のできる人がいてくれて、特に困ることもなく過ごしていました。しかし今回は違います。一人です。もちろん私は英語もタガログ語も話せません。友人には、私が自ら進んで過酷な環境に身をおくことを驚かれました。むしろ私自身も驚きです。ドキドキしながらホストファミリーの家へ向かい、ドアを開けると……「こんばんはあーいらっしゃい!!」とても歓迎してくれました。……あれっ!? 日本語?? そうです。私のホストマザーは日本で働いていたことがあり、日本語がペラペラ。おかげで私はまた不自由なく過ごすことができました。

2つ目は、「おさづけ」です。私は天理高校を卒業し、「おさづけの理」も頂いています。しかし、私自身それほど熱心に天理教を信仰しているわけではなく、「おさづけ」も取りつがせてもらったことはありませんでした。今回は天理教の東本大教会サンタローサ出張所の先生方にお世話になり、午前中は一緒に「にをいがけ」と「おたすけ」に同行させて頂きました。「目がテン」とはまさにこのことでしょう。私はそこで病気でもお金がなくて病院に行くことができない人たちや、日本では考えられないほどとても貧しい生活をしている人々を目の当たりにしました。そして彼らを前にして、何か私にできることは??そう考えて出た答えが「おさづけ」でした。しかし、やり方がわかりません…。私にあるのは心意気だけです。初めて心から素直に神様に助けを頂きたいと、思いを込めてお願いさせていただきました。

3つ目は、フォトランゲージです。フォトランゲージとは、(社)青年海外協力協会から出版されている教育教材の一つで、写真と文章でいろんな国の現状を伝えるというものです。私はフィリピンから帰ってきてから、自分なりのフォトランゲージを作り、私が体験してきたことを多くの人に伝えるという機会を頂きました。結果は、大失敗……。しかし、たくさんの人が興味をしめしてくれて、真剣に話を聞いてくれて、フィリピンという国を、その現状を知ろうとしてくれました。

出張所のみなさん、ホストファミリーのみんな、小学校や高校の子どもたち、「おたすけ」で回った所の人たち…私がフィリピンで出会った人たちはみんな笑顔でした。そして、私自身が毎日笑顔でした。楽しくて楽しくて自然と笑っていたのが半分、もう半分は自分にできる精一杯の恩返し。とても簡単に人を喜ばせる方法を見つけました。

3つの初体験を初めとする色々な体験やたくさんの人との出会いを通して、自分が幸せであることを再確認し、「喜ばせ上手な人」になりたいという思いをより一層強くさせることができました。

この一週間は、なんだかとても私が私らしくない一週間でした。これからは幸せを呼ぶ笑顔キャラでいこうかな♪♪一緒に行って活動したメンバー、見守って下さった先生方、出張所の方々、ホストファミリー、「フィリピン・プロジェクト06」に関わる全ての人に感謝します。本当にありがとうございました。

フィリピンに行って

④ 半田 美津子



フィリピンに行くまでの準備のこと、フィリピンでの1週間の生活、そして帰ってきてからもたくさんの思い出があり、とても書ききることができないな…、と思うくらいこのフィリピンでの活動ではいろいろ体験できたなど実感します。2年前のフィリピンメンバーの話聞いて、いつか行ってみたいと思っていたのが実現して、それに負けず劣らず私自身もいっぱいいろんな経験や感動を得て帰ってきて、こんな風に感想文を書いているのが不思議な感じです。

その中でも私が印象に残っているのが小学校での交流です。みんな紙芝居の準備をしたりプログラム内容を決めたりするのは大変だったけど、みんなでどうやら喜んでもらえるか、楽しんでもらえるかと考えながらやるのは私自身すごくいい経験にもなりました。でもその反面本当に喜んでもらえるのだろうか、と不安や心配になることもたくさんありました。だからその分、小学校でみんなが真剣に鶴を折ってくれている姿を見てすごく嬉しかったし、がんばって準備してきた甲斐があり、来て良かったなど思った時でもありました。帰国してからもこの時に使った紙芝居をコンテストに応募したり、絵本を作る計画をしたりなど、その時だけで終わるのではなく、後々も続くものをみんなで作れたことを嬉しく思います。

また、フィリピンでのホームステイも貴重な経験でありいい思い出です。私は何回かホームステイを経験しているにも関わらず、未だに慣れないということ、行く前に聞いていた話では日本での生活とは違うところが多いということ、そういった不安な点がいつも頭の中をよぎっていたので正直フィリピンでの生活は不安でした。でも家族のみんなはとても優しく、すごく楽しく過ごすことができました。フィリピンの家族の中で自分も同じように生活することは滅多に経験できないし、何よりもフィリピンを身近に感じる事ができたなどと思います。

今回のプロジェクトでは本当に多くの人にお世話になったなどと思います。サンタローサ出張所の方々、私のホームステイ先の Almira ファミリー、みんなのホームステイ先の家族、高校や小学校で出会ったみんな、「にをいがけ」中に会った方々や、「おさづけ」を取り次がせていただいた方々、他にもお世話になったみなさんへの感謝の気持ちでいっぱいです。たった1週間という短い期間だったにも関わらず、本当に多くの人々と接する中で、みなさんの優しさや温かさを感じることができました。私たちが何かをすることで、みんなに喜んでもらいたいと思っていた…、と前の方にも書きましたが実際に現地に行ってみると、逆に喜ばせてもらってばかりだと思いました。私に何ができたかなあと考えてみると、大したことは何一つできませんでしたが、今回の経験を通じて、何かを提供するので終わるのではなく、その提供した物を同じ目線に立って一緒に作り上げることが大事なんだなど気付きました。「国際参加プロジェクト」には大学生活において最初で最後の参加になりましたが、もしまた来年以降も今回のフィリピンのような活動が続いて大学生以外の枠で参加ができるならば、また行ってみたいと思うし、それ以外でも何らかの形で関わり続けていくことができれば、と思います。

最後になりましたが、今回一緒に行ったフィリピンメンバーの皆さん、近藤先生、澤山先生、本当にお世話になりました☆みなさんと行けて本当に楽しかったです。

体験しなくちゃわからない

⑤ 三島 千佳



極彩色に彩られた街、人々は明るく陽気で人懐っこく、もてなすことやカラオケやダンスが大好き。フィリピンの印象を表現するとこんな感じです。

しかし、空港から一歩外に出てバスで移動してみると夕方から夜にかけて通りにはどんどん人が増えてゆきます。交通状況もあまり良いとは言えず、始終ハラハラしていました。渋滞で停車していると子どもたちが車の窓越しに物を売ったりしていました。

マニラから二時間ほどでサンタローサ出張所に到着し、各ホームステイ先へ。移動手段にはまた驚きました。トライシクルというサイドカーのような乗り物でホームステイ先まで案内されたのです。どうりで道がほこりっぽく排気ガスのにおいで蔓延しているはずです。私のホームステイ先が思いのほか大きな立派な家だったので驚きました。家族構成は弁護士をやっているお父さん、お母さん、男の子三人で、うち二人はマニラで勉強しています。そして、メイドさんとその息子さん？らしき男の子です。彼女がメイドさんだと気がつくまで数日かかりました。てっきり娘だと勘違いしていました。

ぐっすり眠った翌日から活動スタート。まずは出張所へ向かい「おつとめ」とミーティング。それから各グループに分かれて「にをいがけ」に同行させていただきました。各家々を回るうちにフィリピンの切実な事情を知ることになりました。糖尿病や心臓病を患っている人や、発育不良などの病気を抱えた人…。所長さん曰く、病気になってもそれがどんな深刻な状況だったとしても先に治療費を払いその証明書がないと診察してもらえないのだそうです。“I am a TENRIKYO missionary.”と言うと快く家に入れてくれ、サンタローサの人の寛容さに驚きました。日本の感覚からすると考えられません。

天理教の信者でない私ははじめ「にをいがけ」って具体的に何をやるのだろうと思っていました。実際に「にをいがけ」に参加させていただいて、地道な活動が人を救っている、毎日話を聞いてあげることでも病気もよくなっていくし、支えている家族も安らぐことができる。人を救うということに形は関係ないのだなと思いました。

交流した小学生や高校生は私たちが企画した活動にとっても楽しんでくれたばかりでなく、学校に到着した私たちをダンスや歌で出迎えてくれたことにとっても感激しました。それにしてもフィリピンの人たちはなぜあんなにダンスや歌が上手なのでしょう？

マザーテレサミッション施設の“Home of Joy”に行ったとき、正直言って子どもたちとどう接して良いのかわかりませんでした。脳に重い障害を抱えていた子どもたちは言葉が通じないのではなく、こっちが言っていることに全く反応できません。あやしてもずっと泣き続ける子がいて、シスターにどうしたら良いのか聞いたところ、「この子は障害のせいでどれだけあやしてもずっとこのままなんです。」と言われたときにはすごくショックでした。こんな状況の中で毎日働いているシスターたちの顔はとても明るく輝いているように見えました。

この実習を通して、フィリピンで出会った人たちの大きなやさしさと自分の未熟さに気づきました。私は“Home of Joy”のシスターたちのように持ち物は服と鞆だけで毎日たくさんの障害を抱えた子ども達の世話をここにこしながらできるだろうか？出張所の方々のように毎日家々を回って悩みを聞いてあげられるのでしょうか？今の私にはできないことかもしれません。だけど、私は私のことから一步一步進んで行こうと思います。たくさんの笑顔が増えてゆくことを願って。

第2の故郷、フィリピン

⑥ 水谷 正孝



「ああ～、フィリピンだ～♪」2年間の時を超え、ついにまたやってきたのだ、思い出がたくさん詰まった地へ！

マニラ空港に降り立つと、そこには2年前に見た光景がそのままの形で待っていた。それはまるで、久しぶりに旧友に再会したときに感じる、一瞬のぎこちなさのあとに感じる懐かしさ、親しみに似ていた。

今回も訪問先となったサンタローサの町は、基本的には2年前の姿のままであったが、大きなショッピングモールなど建設中の建物も含め数多く、急ピッチで進む発展を見てとれた。一方、道路を行き交うジープニー、トライシクル、そしてその間を見事にすり抜けていく人々の光景。そこにはフィリピンの人々の生活の勢い、活気で満ちていた。ちなみにフィリピンでは、日本にあるような整備されたシステム（信号や横断歩道）は大きなハイウェイ以外にはあまりみられないため、慣れてない日本人にとったら道路を横断するのも一苦勞である。抜群の判断力、何よりも勇気が必要である。しかし前回の経験からか、このような日本とは全然違う環境にも（当然驚くことは多いが）素直にその違いを受け入れられる自分があることに気づいた。いい意味でその違いを楽しんでいたと思う。

このプロジェクトの主な活動は、現地の学校との交流会（文化、スポーツ）、「にをいがけ」に同行させていただいたフィールドワーク、街の清掃などであった。中でも感動したことは、2年前にお世話になったホストファミリー、友達たちとの再会、さらに前回交流した子どもたちとの偶然の再会であった。子どもたちの中には、前回参加した学生たちみんなでサインをしたノートを見せてくれる子もいた。その子たちが自分のことを覚えていてくれたこと、そしてその小さな紙をまだ大切に持っていてくれたことなど、2年前の自分の姿が思い出され、一瞬にして時が繋がった。「時間が経っても、真に築いた人との絆は決して薄れない」ことを、フィリピンの子どもたちに教えられた。子どもたちはとてもエネルギッシュで、彼らの心からの無邪気で新鮮な笑顔には心が洗われる思いがした。

またフィールドワーク中に行った「にをいがけ」では、出張所の先生と多くの家庭を訪問し、寝たきりのおじいさん、半身不随のおばさんなど、身体的にも本当に多くの人々が助けを必要としていると実感した。その中で、心の助かりとも言える天理教の教えがその人々にはどのようにうつっているのだろうか。天理教信仰者である自分自身も、「おさづけ」をとりつがせていただく機会をいただき、ちょっとでもお役に立てたのならうれしい限りである。

本プロジェクトでは、学生リーダーとしての役割もあった。表敬訪問、交流会の度に、大勢の人の前で話す機会もあり、貴重な経験をさせていただいた。代表者として喋ることの責任を実感した。

フィリピンは他のアジア諸国同様、経済的に大きな発展を遂げようと必死である。心からフィリピンの政情安定、経済発展を願うし、私個人としても、フィリピンのようなアジアの発展途上諸国と日本とをつなぐパイプ役として近い将来活躍したいという思いがある。学校に通っていない子どもたちを見る度に、将来を担うこのような子どもたちのための社会（国を問わず日本でもフィリピンでも）でなければいけないと痛感した。最後に、今回のこのプロジェクトにかかわり、自分を支えてくれた皆様、本当にありがとうございました。2度の「国際参加プロジェクト」を通して、「他者への献身」を体験、実践し、大きく成長できたと思う。フィリピンでの経験を今後につなげていき、何かの形で恩返しができる方がいいと思う。ありがとうございます。

サラマッポ

⑦ 池戸 大津子



一週間という短い期間の研修でしたが、フィリピンで過ごしたあの一週間がどれだけ大きなものだったか、この経験は一生私の中に生きていくと思います。

今回3回生になって初めて、この「国際参加プロジェクト」に行かせていただきました。自分のなかでこれといった具体的な目標は定まりませんでしたが、ただ、行ってみたい、人と関わる活動がしたいという今までにないような強い気持ちがありました。

そしてとうとうフィリピンへ。「わぁ〜フィリピンだ！」飛行機を降りるとそこはもう日本とは全く違う人、街、空気。感激と同時に不安な気持ちが迫ってきました。この時、特にホームステイのことを考えていたと思います。実際にホームステイでの生活は、フィリピンでしか経験できない出来事に何度も心が倒れそうになり、ホストファミリーに隠れて泣いたりもしました。その涙の訳は・・・お葬式です。

ホームステイ2日目。この家族、環境に慣れようと必死だった私は、とにかく笑顔でいようとしていました。しかし早くも2日目になって、なんだか家に帰るのが嫌になっていました。そんな時出張所の方から、「あなたのお家の近所で今日お葬式がありました。今日から一週間夜中までみんなカラオケをして騒いだり、泣き叫んだりしています。」と言われました。フィリピンではお葬式があると一週間ご遺体を自宅に置き、その間夜中までカラオケをし続けるそうです。(なんでわたしだけ...)帰宅する頃にはもう泣きそうになっていました。家の前に着くと、もうたくさんの人、人、人。ここで暮らしていけるのだろうか...そう思うと辛くて涙が込み上げてきました。「ごはんだよ！」お母さんに呼ばれて泣き顔を見られないようにみんなと食事をしました。昨日まであまり話をしなかったお母さんが私の顔を見るなり、「ゆっくりしなさい。あなたは私たちの家族なんだから。」そう言ってくれた瞬間気持ちが軽くなり、今まで苦しかった気持ちが一気になくなってしまいました。カラオケなんてなんのその!!お母さんに連れられ、恥ずかしながら二度もみんなの前で歌を披露しました。

しかし5日目、とうとう恐れていた事態が起きてしまいました。。。寝不足と疲労で体調を崩してしまったのです。このことでお母さんや家族に大変な心配をかけてしまい、私はカラオケの音が聞こえないようにと近くにあるお母さんの妹さんのお家へ引越し、近所の人たちみんなが集っていたカラオケのセットまで移動させてしまいました。本当に申し訳なく、そしてみんなのやさしさにまた涙が出ました。

サンタローサを出発する日には家族みんな涙を流して私を送りだしてくれました。その日は朝早く起きて近所の写真を撮りに回りました。会う人会う人「Good morning, Taz!」と言って私の名前を呼んでくれました。あのカラオケのお陰だなあと今は思います。

こんなにも短い時間の中で、こんなにも深く人とつながることができたのはこの人たちの人を思いやるやさしさ、家族の絆の強さがあるからだと思います。つい先日、家族から手紙が送られてきました。「まだ1歳のサンドレーが、「たづはどこ？」と毎日のように聞いてくるわ。」とお母さんは言っています。私は何もできませんでしたが、フィリピンへ行ったんだ、たくさんの人たちとつながれたんだと再び実感することができました。

ホームステイのことばかり書きましたが、この研修がこんなにも素晴らしいものになったのは、本当にたくさんの方々のお陰です。本当にありがとうございました。一番影で支えてくれた私のお父さん、お母さん、兄弟。本当にありがとう。飛行機を見ると、いつかまた行ける日が来る!とホストファミリーを思い、今日も自転車に乗り元気に学校へ!

サラマット

⑧ 井上 雅之



今回のフィリピンへの渡航は私にとっては2回目になる。私が天理大学に入学した頃の頃、掲示板に貼ってある「国際参加プロジェクト」の掲示を見、そして初参加したのが2年前。そして、初めての海外への渡航が「国際参加プロジェクト」でのフィリピンであった。2年前のプロジェクトでは私が今までに経験できない、また、した事もない出来事や体験を2週間の間に味わうことが出来た。そのためかフィリピンと言う土地には人一倍の思い出と思い出、そして、たくさんの出会い、感動が存在していた。そして、2年前のプロジェクトが文集作りも含め終了したとき私が感じたのは、「いつか恩返しをしたい。」ということであった。ホームステイでお世話になった家族、マニラ、サンタローサ両出張所の関係者、リコーダー指導をしたアンヘレスの小学生たち、そして天理大学とこのプロジェクトに。私はボランティア、国際参加と言う形でフィリピンへ旅立ったが私自身の方が感じる事、勉強になった事、感謝すること、そして、自分自身のあらゆる能力の低さなど感じる事が多かった。そんな中で、澤山先生からの今回のプロジェクトの話を知ったときは、まさにそのチャンスが来たと感じた。またフィリピンへ行くことが出来る事、過去のフィリピンでの思い出、フィリピンにいる友人達の事を考えながら私は今回のプロジェクトに参加することに決めた。

サンタローサの町は2年前とまったく変わっていなかった。当時のホストファミリーもみんな元気であった。日本に帰ってからも彼らは僕に手紙を送ってくれ、安くない料金を払ってまでも国際電話をかけてきてくれた。そんな彼らにもう一度出会うことが出来本当によかったと感じている。今回の私のホストファミリーは前回とは違う家庭でお世話になった。しかし、今回お世話になった家庭も私を本当の家族の様に接してくれとても感動し、フィリピン人の特質を肌で感じる事が出来たように思う。

今回のプロジェクトの内容は大きく分けて4つである。高校での小運動会、小学校での文化交流、お世話になった方々を招待してのさよならパーティー、そして、マニラにある“Home of Joy”での食事介護の手伝いである。小運動会では、事前研修を何度も重ね 当日の予定を担当者を中心に考えた。当日は予定通りに行かずしどろもどろする場面も数回あったが、生徒たちの楽しそうに玉入れや大縄に参加している姿や笑顔を見ることができ、運動会を企画し実行することができ本当によかったと感じた。

小学校での文化交流では文化班が作った紙芝居が私は印象に残っている。内容は日本人の千羽鶴への考え方を伝えるストーリーであるがフィリピンの小学生たちに我々日本人の考え方や価値観を分かってもらうことが出来ていたのなら、とても素敵なことであると感じるし、国際的な文化交流を果すことが出来た証であると思う。

そして、私は料理係りとして、さよならパーティーの準備と料理メニューを考えさせて頂いた。料理については棕野さんのおかげでとても素晴らしいものができ、お世話になった方々がおいしそうにまた楽しそうに食している姿を見ることができてよかった。その表情を見ると少しは恩返しが出来ているのかなと感じる事が出来たが、やはり今回も私自身の方が勉強させられる事が多かつたし、感謝する事が多かつた。私は、フィリピンでの人の出会いに本当に恵まれているのだと思う。サンタローサに素晴らしい友人達がいることを私は誇りに思う。

“Home of Joy”では、孤児や障害を持った子どもたちに食事の配膳手伝いをした。最初に“Home of Joy”に着いた時、様々な状況の末に預けられた子どもたちを見て、とても複雑な思いを抱いた。そして、シスター達の子どものための接し方など、とても感動し学ぶことが多かつたように感じる。“Home of Joy”での滞在時間は昼食時の配膳だけととても短くはあつたが、とてもよい体験ができた。

最後に、私は2年前の体験の感想文を奈良新聞に掲載していただいた。その時私は、日本は自国がどう思われているのかを強く意識する代わりに、自分たちが他国をどう思っているかは深く考えないと言う趣向の意見を書かせていただいた。今日では、フィリピンからの看護師、介護師の受け入れをするという話が聞かれる。そのような話が出ている今だからこそ自分たちが彼ら（他国）に対しどのような感情を抱いているのか考えなければならぬと感じている。

1週間の滞在でとても有意義な時間を過ごせたと思う。このような素晴らしい機会を与えて下さった先生方に、また、フィリピンの人々にとても感謝します。ありがとう。

フィリピン滞在を通して～

⑨ 村田 明彦



2006年8月14日から1週間に亘り、遠くフィリピンはサンタローサとマニラでの「国際参加プロジェクト」に参加させて頂いた。参加動機は、単に海外に行きたいということもあったが、それ以上に自分の視野を広げたいという強く思う気持ちと、将来への展望をより強くそこに見出したいということが心の大きなシェアを占めていた。

14日の午前中に、関西国際空港から香港を経由してフィリピンの首都マニラへと向かった。そこからさらに車で2時間程車にゆられ一路サンタローサへ。途中、車内から見える景観のそのあまりの日本との違いに、当然といえばそうだが、初めてフィリピンに来たという実感が沸いてきた。そして同時に自分のコミュニケーション能力に関する不安も。段々と疲労と共に積もる不安を抱えながら、天理教東本サンタローサ出張所に到着した。そこでホストマザーの Cely さんを紹介してもらい、ホストファミリー宅へ。互いの母語が通じないなか、英語を介しての会話が始まる。トランクを引きずり、見慣れぬトライシクルと呼ばれるタクシーが排気ガスを吐きながら横を通り抜ける道を、Celyさんと歩く。周りはなにもかもが新鮮だった。家につくとホストファザーの Obet さん、長女の Rocel、そして次男の Omar を紹介してもらう。その後、皆で晩御飯を頂いたのだが、一緒にご飯を食べているその時まさに、自分のフィリピンでの本当の活動がスタートしたように思う。

食生活においては、まったくと言っていいほど苦勞しなかった。何を出されても美味しかったし、米の違いもそれほど気にならなかった。ただ水の質はやはり日本の方が良いと思わずにはいらなかった。

2日目以降のプログラムとして高校訪問、小学校訪問があったが特に強く心に残っていることが2つある。まず、「にをいがけ」(天理教でいう布教活動)に同行させてもらったことだ。出張所の上田先生、信者の方々とグループを作り、近所の家々を回らせて頂いた。大抵の場合、既に先生が布教に回られておられるところで、お家にあげて頂き「おさづけ」(天理教の救いの業)、を取り次がせて頂いた。このことは天理教未信者の参加者にとっても、フィリピンの方の暮らしぶりを間近で見る良い機会になった。僕自身は、参加するにあたり、「おさづけ」を取り次がせて頂きたいという思いがあったので、大変感慨深いものがあった。この活動は、家々を回らして頂き「おさづけ」を取り次がせてもらうだけでなく、人々の抱えておられる悩みや不安を聞かせてもらうのが大きな意

味合いを持つのだが、些細なことにも気を配り、コツコツと人の為歩き続けておられる先生や信者さんのその姿に、天理大学の目指す「他者への献身」を見出すことができた。

歩いて気づかせてもらったことだが、フィリピンに来る前はフィリピンが結構貧しい国だという先入観があったのだが、ホストファミリー宅でいったんその思いは無くなりかけた。しかし、実際に自分の足で歩いて話を聞いてみるとやはり貧困の度合いは高いようである。その中で自分は今、そして将来なにができるのか？深く考えなくてはならないと再認識することが出来た。

もう1つはマザー・テレサミッションの孤児院を訪ねたことである。Missionaries of Charity “Home of Joy” という施設で、親に見捨てられたり、身寄りのない子ども達をシスター達とボランティアの方がお世話されているのである。シスター達の国籍の多様さにも驚いたが、協力しあって子ども達に接している姿にとっても感動した。キリスト教の教えはよく知らないが、人に救わってもらいたい、人の為に生きたいという姿ほど素晴らしいものはないと思う。子ども達の中には、重度の障害をもっている子もいたが、不思議とみんなが元気で、それを支えているシスター達がいいて、そのシスター達の心を支えている何かをあの場所では確かに感じ取ることができた。

今回の活動を通して、たくさんの人に支えて頂いた。大学の先生方、家族、出張所の方々、ホストファミリー、(社)青年海外協力協会(JOCA)や独立行政法人国際協力機関(JICA)の方々、ほんとうにたくさんの方々のお力添えと思いを頂いて成り立った。ここで得たこと考えたことを、後々活かして生きていきたい。今の自分には、人の支えになるような大きな力はないが、これから先を見据えてもっと大きな人の為になれるなにかを掴めるように、心も視野も広く努めていきたい。

「フィリピン・プロジェクト 06」に参加して

⑩ 千歳 章倫



【参加動機】

「国際参加プロジェクト」の存在を知ったのは、昨年の中国での報告書作成を業務の上から携わらせて頂いた時でした。私が本学在学中にはなかったことで、今の学生を羨ましく思うばかりでした。

「フィリピン・プロジェクト 06」が実施されるのを知ったのは6月下旬のことでした。インドネシア・プロジェクトについては早くから募集、活動が行われていましたが、学生が対象で社会人の参加率はなく、私も例外なく対象外でした。しかし、「フィリピン・プロジェクト 06」の社会人募集のポスターを学内で目にし、本学卒業時から海外での活動に興味がありながらも家庭の諸事情等で足を踏み入れる事が出来なかった私の気持ちが揺れ動き、澤山先生の熱い思いにも刺激され参加を決意しました。

【準備段階】

こうして初の社会人として学生たちに混じり、プロジェクトに参加したわけですが、準備段階から参加学生が積極的で自ら計画を立てて、自主的に準備する姿に驚き、自分が学生時代にはないものを感じました。と同時にこんなにしっかりしている彼らの中へ社会人が混じって活動する意味とは何なのかという事を考えさせられました。とにかく私が意見するのではなく、あくまで学生主体で私は一緒に参加させて頂くというスタンスと、このプロジェクトを通じて自分ができる国際協力を見つけ出すとの思いでプロジェクトに臨みました。

【現地活動】

実際フィリピンへ行き多くの人々と出会い、多くの貴重な体験をさせて頂くことができました。

① 「おたすけ」

毎日午前中は「おたすけ」に同行させて頂きました。サンタローサには約100軒の「おたすけ」受け入れ先があります。その家々を回らせて頂きましたが、そこには日本人ともすれば私達天理教信者も忘れていたのではなかろうか「神にすがる姿」を目の当たりにしました。「おたすけ」受け入れ先はあくまで受け入れて頂いているだけで、天理教の信者ではありません。しかし、神という存在にたすけを求める姿は、現在の日本人に忘れられている姿ではないかと感じました。と同時に自分の信仰を見つめ直すことが出来ました。

②ホームステイ

現地滞在中はレンレンさんの家でお世話になりました。トイレは紙を使わない、洗濯は手洗い、風呂は水を浴びる等…。家族の一員としてフィリピンでの生活を送り、食事も思いのほかおいしかったです。ただ朝食にラーメンが出てきたのには少しひきましたが…。唯一不自由したのが言葉でした。英語があまり出来ない私には、相手が言っていることはなんとか理解出来ても、言いたい事が言葉になって出てこない。日常の事は身振り、手振りを交えながらもどうにかなりましたが、フィリピンにおける色々な問題点等の聞きたい事が聞けず、事前にもっと英語を勉強しておく必要があったと後悔しています。

③スポーツ・文化交流

どちらの学校も最高のパフォーマンスを持って迎えて頂いた事にはとても嬉しく、感謝しております。

スポーツ交流では、大縄跳び、玉入れ、二人三脚と日本のスポーツに加えフィナーレは現地で人気のバスケットボールと非常に盛り上がりました。文化交流においても、千羽鶴の紙芝居をし、その意味を理解(?)してもらった上で、鶴を折ったり、日本から届けた絵の交換で絵を描いてもらいました。折り紙や絵に取り組む子ども達の真剣な眼差しが印象的でした。

[プロジェクトを終えて]

このプロジェクトに社会人として参加し、学生達に何も社会人らしい事をしてあげられなかった事は申し訳なく思っております。しかし、現実のフィリピンの生活を目の当たりにし、たくさんの人々に触れることが出来ました。日本以外の国の事は今まで真剣には考えたことはありませんでしたが、今回のプロジェクト参加でなんとなく自分に出来ることが見えてきた気がします。そして課題は言葉です。人の心を知るには言葉が話せなければわかりません。自分が学んできた言語を生かしながら、英語も少しずつ勉強しようと思います。

また「高大連携」の話も持ち上がっています。私は二部生だけに目を向けるのではなく、一部生にも目を向け、同じ高校生同志と一緒に参加することでよい刺激を与え、より意義のあるプロジェクトになるのではないかと考えております。実現に期待をしております。

最後になりましたが、事前の準備から現地の引率までお世話頂いた先生方、現地での我々の生活面や安全面に配慮頂いた上田先生をはじめとするサンタローサ出張所の皆様、そして「フィリピン・プロジェクト06」と一緒に参加した仲間達、本当にありがとうございました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

ありがとう

⑩ 椋野 和子



「フィリピン・プロジェクト06」に社会人として参加させて頂き、年齢差を超えて仲良くしていただいた皆様に感謝致します。参加前、メンバーの皆さんが落ち着いているのがとても不思議でしたが、事前研修を重ねるうちに、海外体験をされている人が多く、しかも英米語コースの人が多くということが自信につながっているのだということがわかり、語学力もなく海外体験もないに等しい私ですが、これで負けてはいられないと奮起しました。国際協力・国際交流についての知識、現地の暮らし振りや情報は事前研修、いただいた資料、インターネットの活用などで学び、短期間のタガログ語学習にも真剣に取り組みました。挨拶程度しかできなくて身振り手振りで苦勞したのもいい思い出です。

社会人として参加して何もできませんでしたが、年の功で困ったときの相談役ぐらいにはなっただでしょうか。看護師として少々の救急薬品は持参しましたが、大した怪我や病気もなく無事帰ってくることが出来たのも皆が心をひとつにできたからだと思います。私は若い頃、海外への夢を抱いていましたが諸事情で実現することが出来ませんでした。夢を忘れていたわけではなく、生活上の幾多の困難を乗り越えて今、やっと実現できる機会を与えていただき、この不思議なご縁に感謝しています。思いを持ち続けることと、その時そのときを一生懸命に生きることが成ってくる理を喜ぶということにつながるのではではないかと人生半ばにして実感しています。プロジェクトに参加したあと、この経験を今後役に立てられるかどうか自信はありませんが、今を精一杯生きることをコンセプトにしていますので、力不足のために果たせなかった事を今後努力していきたいと思っています。

私の参加目的は海外へ第一歩を踏み出すことでした。フィリピンへ到着したときから感動の連続でした。それはマニラ空港から天理教東本大教会サンタローサ出張所までの約1時間半の道中、あの光景は衝撃的でした。半端でない車の量と喧騒、排気ガスとクラクション、信号のない中ぶつかることもなくすれすれに行くスリル満点の運転、道路沿いに立ち並ぶ屋台のような店や車の修理屋さんや薄暗い照明のなかに群れ遊ぶ幼い子どもたち、大人たち、人、人、人でむせかえるような熱気に包まれて、まるでお祭り騒ぎのようでした。日本では有り得ない情景でしたがそれはどこか懐かしい、うれしい衝撃でした。このような感動こそ行ってみなければ味わえない、一歩を踏み出したことで得た感動なのです。この身でじかに感じた感動を、この経験をなんとか生かしていかなければと思っています。これは情景の感動ですが体験の感動もたくさんありました。工業高校での映像による学校紹介、両国国歌斉唱、民族

舞踊、バスケットボール、大縄跳び、二人三脚、玉入れ交流と授業風景、小学校では紙芝居の披露、折鶴、絵画交換、歌遊び、民族舞踊に直に触れ、学生同士の交流に十分な効果を上げたのではないのでしょうか。現地フィリピンの方とのふれあいはサンタローサ出張所の信者さんと毎日お会いでき温かい心のふれあいが出来ましたし、海外に来て天理教の先生と一緒に家庭訪問したときの感動的場面を思い出すとき、救いを求めるあの姿と喜びの声、いつまでも強く心に残っています。今後是非継続されることを望んでいます。天理教東本大教会サンタローサ出張所の上田先生、木本さんの多大な協力で厚くお礼申し上げます。

ホームステイすることによりフィリピンの生活を肌で感じる事が出来、何にも変えがたい貴重な体験をさせていただきました。食事は朝から油っこいラーメンが普通であったり、紙を使わない排世の習慣に困り、日本での習慣と同じようにすることのお許しを得たり、汲み置き水による水浴びにも何の抵抗もなく毎日出来たことも懐かしく思い出されます。順応性の高い人間だからといわれそうですが、誰でもそうできる不思議な国なのです。移動手段のトライシクルやジープニーは遊園地の乗り物に乗っている気分でしたがタガログ語も英語も出来ない私にはとても一人では乗れない乗り物でした。市場での買い物や食事ですさまざな生活様式が見て取れ、なんでも揃うスーパーマーケットがあることにも驚きました。

職業柄マニラ首都圏トンドの福祉施設「Home of Joy」訪問は非常に考えさせられることが多くありました。マザーテレサの遺志を継いでさまざま理由で育てられない孤児や脳障害児たちを手厚く育ててくれる施設です。想像していた暗いイメージではなく「暖かい手」でお世話されている場面を目のあたりにし、日本では希薄になっている精神面を重視されているということに、ある意味日本より幸せな生き方が出来る国ではないのかとさえ思うほどでした。これらの体験を自分の中でどう捉えるかということですが、異文化に触れることはそれだけで十分意味のあることなのです。今後に生かすという点ではきっと参加者一人一人が意味ある行動に移していけることでしょう。自分の知らない世界を知り、感動し、体験したことはどこで芽を出すか分かりませんが心の奥にずっと残る宝物なのではないでしょうか。

地域文化研究センターの先生方の目に見えない所での多大なご苦勞、準備のための会議、プロジェクトに対する思い、学生におかけいただく思いなどを考えますと、すべて私たちをお育ていただくためにご苦勞下さっていることを思うとき、それに甘んじて参加させていただいていることに何か申し訳ない思いと感謝の気持ちでいっぱいです。「国際参加プロジェクト」の実行のために現地調査に奔走していただき、多くの時間とご苦勞、ご心配をおかけしました近藤先生、澤山先生に感謝申し上げます。こんな素晴らしいプロジェクトのある天理大学に拍手を送ります。

第二部

(活動記録)

1. 派遣前研修、結団式&フィリピン滞在日記
2. 食事班レポート
3. スポーツ班レポート
4. 文化班レポート
5. ホームステイレポート
6. "Home of Joy" レポート

サンタローサ市位置



1. 派遣前研修、結団式&フィリピン滞在日記

公式な派遣前研修は、7月10日(月)と7月31日(月)の2回だけでしたが、それぞれの班(食事、スポーツ、文化)で準備を行いました。

結団式 8月10日(木)



ついに出発前の結団式。みんなお揃いのユニフォームを着て、期待と不安の入り混じった表情でそれぞれ参加の意気込みを語りました。

あれれ、この写真にみんないるのかな?まさか遅刻したなんて…。あれ、三島さんでしたか…??



結団式終了後、みんなが無事に現地に到着し、元気に活動して帰国することができるようにと、天理教本部で「お願いづとめ」をしました。その後神殿前で記念撮影!みんないい表情をしていますね♪

1日目 8月14日(月)



左の写真は関西国際空港にて撮影。後ろに見えるのが、今回お世話になったキャセイパシフィック航空☆いよいよ日本を飛び立ちます!関空→香港→そして……目の前に広がるのは、待ちに待ったフィリピンです!!やっぱり日本とだいぶ景色が違いますね♪



この写真はマニラ空港に到着した時の様子です。厳しい検問（荷物チェック）をどうにか通過したものの、あいにく外は雨…。しかしそんな雨にも負けず力強くフィリピンの地を歩き始めました。



マニラからサンタローサへの移動中。初めてみるフィリピンの町並み、風景、人々、日本とはまったく違った交通事情のなか、揺られること約2時間……。



到着！！ついにやって来ました。目的地サンタローサ！！こちらは今回お世話になる天理教東本大教会サンタローサ出張所。みんな長旅の疲れを押し殺しつつ、笑顔で参拝（苦笑）。ホームステイ先のファミリーも温かく迎えてくれました。

出張所長の上田先生より、慰労、激励、ホームステイの諸注意（犬には気をつけて！！）をうかがってから、各自ホームステイ先へ。いざ6日間の異文化体験のはじまり♪



2日目 8月15日(火)



各グループに分かれて、現地の先生方や、信者さん方の案内のもと、いろいろな家庭にお邪魔しました。何度か「おさづけ」を取り次がせていただく機会もありました。

早朝、出張所に集合。みんなどんな一夜を過ごしたのかな？みんななんかまだ眠たそう。「朝づとめ」を終えて、「にをいがけ」に同行させていただきました。



その後、サンタローサ市内を散策。左の門はサンタローサアーチ。右に見えますのはサンタローサ市役所でございます。市役所では残念ながら市長さんは不在でしたが、美しい女助役さんのもと自己紹介。今回会えなかった市長さんの顔写真入りキーホルダーと黄色い帽子をお土産にもらいました。





これがフィリピンで有名なトライシクル。フィリピンのみなさんの毎日の通勤・通学の足です。私たちもそのスリリングな乗り物に病みつき！！子どもたちなんか一度に8人くらい乗っても大丈夫♪



午後からは、翌日の高校でのスポーツ交流（左の写真）、翌々日の小学校での文化交流（右の写真）のプログラムの打ち合わせへ。みんなお互い英語で陽気に打ち合わせをしました。小学校では折り紙を折る練習をし、お互いの国のことについて話したりしました。



過密スケジュールの中での、仲間同士の打ち解けたひとコマ。坂上君、三島さんのやりとりは私たち他の仲間を和ませてくれました♪

3日目 8月16日(水)



この日の午前中も「にをいがけ」を兼ねたフィールドワークへ。写真はちょっと一休みで、ココナッツジュースのようなものを飲んでいるところ。これが暑いフィリピンでのエネルギー補給に大活躍！



そしていよいよ本日のメインの行事、Science and Technology High School との交流行事のために学校へ。着いてビックリ。りっぱな幕(左の写真)まで用意していただいていた。子どもたちは、外国からの訪問者にちょっとそわそわ。みんなは交流行事楽しんでくれるかな…。



左の写真は、先生方との挨拶のために案内された部屋での様子。校長先生による挨拶のシーン。この校長先生がとても明るくて、個性的！学校の概略、現在の様子などを話していただきました。この学校は新設5年目ということ。先生方たちの熱意を感じることができました。



次は私たちが自己紹介をする番。練習してきたタガログ語で、つかえながらもなんとかできました。ちゃんと伝わったかな？下の写真は各教室を回ったときのものです。



左の3枚の写真は学校が用意してくれた昼食。肉料理、野菜炒めなど出していただきました。なんといつても本場のマンゴーの味は忘れられません。(笑)



左の写真は昼食後のひと時。子どもたちに囲まれて笑顔を見せる半田さん。こんな元気でかわいい子どもたちに囲まれたら自然と笑顔になっちゃいますね♪



校庭の真ん中に着席し、子どもたちが両側に座って、いよいよ交流会のスタート。学校による大きなビデオカメラでの撮影もあり、ちょっぴり緊張気味…。



左上の写真は、子どもたちによる歓迎の出し物。軽快でエネルギッシュなダンスでした。あれれ、でも私たちも一緒に踊ってますね♪そうなんです、途中でその子たちに手を引かれて一緒にダンスの輪の中へ。上手に踊れたかな…？(苦笑)村田君、井上君、水谷君、三島さんが一緒に踊っている様子。楽しそうだ♪ 右上の写真はフォークダンスのような踊りを見せてくれているところです。

いよいよ私たちの出番！用意してきたスポーツ交流の内容は、玉入れ！二人三脚！大縄！（大縄はいろいろなところで行われているかな？）。玉はサンタローサ出張所で事前にお手製のもの。籠は学校が用意してくれました。



籠を持っているのは、村田君、井上君。背の高い学生がいてよかった！マイク司会担当は水谷君。BGM担当坂上君。

子どもたちはすぐにこのゲームを理解して楽しんでくれました♪



次は二人三脚！子どもたちは本当にのみこみが早い！うまく走れるペアもたくさん！でも、用意した紐が切れてしまう場面も…。しっかりしたもの、タオルなどのほうがよかったな（反省）。参加できる人数が限られていたけれど、みんな積極的に参加しようとしてくれたので、先生たちはメンバーを選ぶのに一苦労しているようでした。

最後の種目は、大縄！あれれ、子どもたちではなく先生たちが跳んでいますね♪子どもたちに負けじと先生たちも大張り切り♪





最後のスポーツ交流は、バスケットボール。フィリピンではバスケットボールが一番人気のスポーツ♪左の写真は、この学校のバスケ部の子どもたち。おそろいのユニフォームを着た姿はかっこいいですね♪

ジャンプボールを制した村田君！天理チームはバスケ経験者の彼にかなり助けられました。本格的な審判の方々が2名もついていて、レクリエーションではない、なにやら真剣勝負の空気の中で試合は進んでいきました。この子どもたちは見た目だけじゃなくて実力もすごかった！13～16歳くらいの子もだったけど、こちらは20歳を過ぎた大学生たち……体力が……（笑）あれれ、もしかして水谷君相手の子たちよりも小さかったのかな？（笑）千歳さんの持久力もすばらしかったですね♪天理チームにはフィリピン人の助っ人が2人加わってくれました。その甲斐あって、2点差で天理チームの勝利！！



左上の写真は試合終了直後のようす。フィリピンの子もたち、特に女の子たちが男性陣を取り囲みました。特に村田君！人気者になってサイン攻めに♪中にはみんなの額の汗をハンカチで拭いてくれる子も。とてもやさしい生徒たちでした。

右上の写真は、試合をしたメンバーと記念撮影をした様子。この中から将来プロバスケットボール選手が果たして何人生まれるかな！？

4日目 8月17日(木)



この日も朝から「にをいがけ」に同行させていただきました。池戸さんと村田君のホストマザーのセリさんが「おさづけ」のそい願い中です。フィリピン滞在中、本当にたくさんの方にみんな「おさづけ」を取り次ぐ機会を与えてもらいました。



今日は小学校の近くのショッピングセンターの中でお昼ご飯。どんどんおかずやごはんが運ばれてきて、テーブルの上はあっという間にいっぱい…。日本でもなじみのあるゴーヤを使った料理や、パスタなどがフィリピン独特の味付けで出されていました。お腹いっぱい♪「いくら頼んでもいいけど、全部食べるように！」と先生の一言。

この日のメイン行事、文化交流を行うため Central 2 Elementary School へ。きれいな花と welcome の文字に出迎えられ感動！！そして小学生からは可愛いダンスと歌、そして先生方もダンスを披露してくださいました。まさにプロ並みの歌声に、またまた感動！！





いよいよプログラムのスタート♪みんなで作った紙芝居をタガログ語で披露!!ちゃんと通じたかは…???ですが、みんな楽しんでくれたはず!!拍手をもらえた時は一安心でした。でも、時折なぜか笑い声が…。



紙芝居を披露したあとは、いよいよみんなで折り紙を使って鶴作りに挑戦。みんな初めて鶴を折るので、最初は難しそうだったけど、一緒に折り始めると、あっという間に作り方を覚えてどんどん折っていってくれました。中には一人で、3羽以上折っている子もいました。子どもたちの楽しんで折ってくれていました。あれっ?左の写真の女の子は折り紙より村田君が気になっている様子…。



これは天理小学校と桜井市立織田小学校の子どもたちが描いてくれた絵を貼っているところです。いろんな絵や工作があって、先生方も興味津々で、熱心に見ておられました。この日は新聞の取材の方もこられていて、絵や鶴の写真なども撮影されました。どんな記事になっているのかな??

この写真はみんなと一緒にエクササイズをしている様子。みんなのダンスはとってもキュート! 数日あのダンスの曲「カプチーノ♪」が頭からはなれなかったという人も…。他にもゲームをするなど、小学校側が用意してくれたプログラムで一緒に楽しむことができました。



折り紙のあとは、日本から持参したクレヨン（使用させていただいたクレヨンは、宮本裕美さんからご寄贈していただいたものです。この場をかりて厚く御礼申し上げます。）で「フィリピンの風景」、「家族」、「将来の夢」のテーマでみんなにそれぞれ絵を描いてもらいました。場所がなくて講堂の床で描いている子もいたり、時間も十分ではなかったりと大変な中、みんなきれいな色使いで丁寧に絵を仕上げてくださいと立派な絵が完成!! 私たちもみんなと混ざって一緒にお絵かきを楽しみました♪



みんなが折ってくれた鶴とフィリピンメンバーが折った鶴を合わせて立派な千羽鶴が完成!!（実際千羽まではいかなかったけど…）その千羽鶴と、紙芝居、そして日本の小学生が描いてくれた絵を記念として小学校に贈呈しました♪今も学校のどこかに飾ってくれているかな??この日も前日に引き続き、みんなはサイン攻めに…。

5日目 8月18日(金)



サンタローサで活動できる最後の日。朝はセリさん宅へ獲れたてのココナッツを飲みに行きました。味は…ココナッツ味！（そのままかよ！！）実はツルン、味甘し…。グアバもいただきました♪さすがはフルーツ天国フィリピン！！



ここがトライシクル乗り場。この日はここでごみ拾いの清掃ボランティアをしました。とにかくごみがたくさん…。澤山先生も一緒にごみ拾い♪隣接する学校の子もたちの大声援の後押しのなか、せつせとごみを集めました。やっぱりきれいな方がいいですよ♪



きれいになった広場を後にするみんな。水谷君いい仕事しましたね～。またごみが散らからないことを祈って…。でも感じたことは、ごみに対しての文化の違いもあるってことですよね。



クリーン作戦大成功！？



これら写真はさよならパーティーの準備の様子です。メニューは、天ぷら、カツ、巻き寿司、フルーツ盛り合わせ、マンゴージュース。この日の午前中に食事班のみんなが買い出しに行ってきました。食事班隊長の三島さんの指示のもと、着々と準備を進めていきました。でも棕野さんの強力なサポートがなければ…(感謝!!)



半田さん、畑さん、井上君の包丁さばきにみんなうっとり。井上君いいお父さんになれそうですね♪



左の写真はさよならパーティーでのひとコマ。天ぷら、とんかつは意外と大好評！たれとご飯のコラボレーションは成功かな！？出張所は人・人・人！私たちのホストファミリーたちへのお礼のパーティーは喜んでもらえたかな？

この日はみんなのホストファミリーがたくさん来てくれて、出張所はとてにぎやかになりました！！写真は畑さんとホストファミリー。みんなホストファミリーと最後の記念に写真を撮っていました。



フォトギャラリーwithホストファミリー



♪笑顔でいっぱい♪



6日目 8月19日(土)



とうとうサンタローサでの研修が終わり、最後の朝。それぞれの家庭での体験は、みんなの心にどのように残ったのでしょうか。確かに裕福とは言えない生活環境の中で感じたこと…。人として相手を思いやる心、尊敬する心、人と人とのつながりを大切にすることを改めて学ぶことができたのではないのでしょうか。

言葉の壁を乗り越えて、習慣の違いに驚き、その違いさえ楽しむところに、ホームステイの醍醐味があったのでは。フィリピンの歴史を紐解いてみると確かに日本は、そこに暗い影を落としています。でも現地の人々から受けた「もてなしの心」は、私たちが日本人として逆に学ぶべきものでした。



「他者への献身」をテーマとしているこのプロジェクト。まず自分達に何ができるのかということを考えることは大切だけど、自分達の概念を捨てて現地に飛び込み、そこで感じる「もてなしの心」を学ぶことで、一方的な献身ではなく、お互いが支えあうという、人が楽しく生きるための本質を学ぶことができたサンタローサでの日々。みんなの笑顔に、サラマッ（ありがとう）！！そして、

Paalam!
(またね)



サンタローサから、いざマニラへ。天理教フィリピン出張所にて、山岸精治先生にフィリピンにおける布教について、お話を伺いました。50年スパンで布教をしておられることに感銘を受けました。その後、今回の研修で唯一の観光へ出発！！この写真はあの有名なマニラ大聖堂！観光がてら市内を歩きました♪マニラ・カトリック大司教の本拠にもなっているこの教会の中では、ちょうど結婚式が催されていて、カトリックの神聖な空気を感じることができました。

かつてのスペイン統治期を今に伝える城壁の町並み。「壁の中の市」という意味を持つ城壁都市、イントラムロス。煌びやかではないけど歴史を感じさせるこの街の隅で物を売っている人々が印象的でした。



移動中に目にしたパッシング川。まさにゴミによって埋めつくされています。物質の溢れている環境の変化に対して遅れているマニラの環境問題を垣間見ました。

これはマザーテレサの精神に基づいて建てられた施設で、障害を持った子どもたちがいる孤児院。私たちは食事を持参し、食事介助ボランティアなどの活動を行いました。なかでもマリアちゃんは車椅子の生活で、英語をきれいに話していました。フィリピンではマクドナルドよりジョリビーのほうが人気があると考えて、Do you like Jollibee?と聞いたら、I like McDonald!と答えたマリアちゃんの笑顔は素敵でした。そしてシスターたちの献身さに圧倒されました。



最後に行ったレストランでのひとコマ。近藤先生の笑顔……素敵です。



7日目 8月20日(日)



マニラではマニラホテルに宿泊しました。“I shall return.”で有名な、ダグラス・マッカーサーの常宿だったそうです。

トリビアを1つ。マニラホテルのエレベーターがアジアで最初に設置されたものだそうです！みんな絢爛豪華なロビーに酔いしれています。



これからいよいよ日本へ。みんな充実した笑顔を見せていますね。いろんな出来事、さまざまな人との出会いがあり、このプロジェクトが意義深いものになりました。私たちは国際協力、地域への貢献ということで参加しましたが、いったい私たちはどれだけのものを残すことができたのでしょうか…。交流を通して、フィリピンの人々からもらったエネルギーのほうが大きいのではないのでしょうか。しかし、この経験は確実に、これから私たちが国際協力により目を向けるきっかけとなり、さらには他者への献身を考えていく貴重な体験になったと確信しています。それを教えてくれたフィリピンの多くの方々との出会いをこれからも大切にしていきたいです。私たちの日本へのお土産は、フィリピンの子どもたちのあの純粋な笑顔♪♪みんなでまた近い将来フィリピンに行きたいね♪♪

2、食事班レポート

【食事班】三島千佳、井上雅之、棕野和子

〈はじめに〉

今回のフィリピンでの活動には、現地学生との交流の他に、ホームステイ先の家族の皆さんやサンタローサ出張所の先生方に感謝の意を表すため、サンタローサでの滞在最終日前日に昼食パーティーが予定されていました。その昼食パーティーを企画、運営するための料理班を事前研修で決定しました。

また、今回のフィリピンプロジェクトに参加していただいた2名の社会人の方々（棕野さん、千歳さん）にも企画運営を手伝って頂きました。棕野さんは料理がとてもお上手で、事前・事後研修のミーティングでも手作りのお菓子をごちそうになりました。今回のフィリピンでのパーティーは現地の方々にとっても喜んでもらえ、大成功に終わりましたが、棕野さんを抜きには不可能であったと感じます。

〈事前研修〉

初回の事前ミーティングで、参加学生9名をスポーツ、文化、料理の三つの班に分けました。料理班は、井上雅之（英米コース3回）、三島千佳（同4回）に決定。

以後のミーティングで、現地で振舞う料理のメニューや食材の入手先の確保、日本から持ち込む物などの話し合いが行われました。現地で振舞うメニューについては、日本料理でなおかつ、フィリピンの人々の口に合う料理で話が進んだ。挙げたメニューには、トンカツ、寿司（手巻き、巻き寿司）、鍋料理、焼きそば、餅、てんぷら、豚のしょうが焼き等でした。

最後のミーティングでは社会人参加者2人の方にも意見を頂いた。棕野さんから、挙げられているメニューはどれも手軽に出来るので大丈夫とのお言葉を頂き、メニューはトンカツ、てんぷら、巻き寿司に決まり、現地のフルーツも振舞うことになりました。なお、食材についてはほとんどを現地で調達することになり、日本からはてんぷら粉だけを持ち込みました。

〈会場セッティング・食材調達〉

料理班は現地のモールに食材を買出しに行き、残ったメンバーで机の配置など会場のセッティングをおこないました。モールでは日本で手に入るものと同じものをそろえることが出来ました。メインとなるのは海老のてんぷら、トンカツ。

出張所に帰り、棕野さんの指示で調理を開始しました。学生メンバーのほとんどは料理をしたことがなく、棕野さんが指示を出し、調理に参加してもらえなかったら料理も完成せず、悲惨な結果になったでしょう。棕野さんの力に学生メンバーは感謝しきりでした。

以下の写真は調理中の様子。



〈パーティー風景〉

パーティーには、ホームステイ先の人々などに招待状を送り、数多くのホストファミリーの方々に足を運んでもらいました。三島料理班長の開始のスピーチの後パーティーが開始され、それぞれ写真やメールアドレスの交換など交流を深め、素晴らしい時を過ごせました。

〈最後に〉

パーティーで現地の人々は、笑顔で我々の作った料理を食してくれて、又、翌日旅立つ我々との最後のひと時に涙を流してくれました。現地の人々の表情を見て、今回の企画は大成功に終わったと感じました。我々の滞在は、出張所の先生方を含む現地の人々の協力なくしては成り立ちませんでした。彼らに感謝の意を表すための今回の企画が成功に終わったことに安堵すると共に、まだまだ恩返しは不十分であろうとも感じます。この場を借りて、出張所の先生方並びに、ホームステイ先の家族の皆様感謝の意を表したいです。
サラマットポ（ありがとうございます）！

下の写真はパーティーの最後にみんなで撮ったものです。



3、スポーツ班レポート

【スポーツ班】坂上典明・畑公依子・水谷正孝・千歳章倫

目的：Science&Technology High Schoolにて学校見学、スポーツ交流

フィリピンでは主要教科以外の授業はあまり行われていないということで、日本の定番競技を盛り込んだプチ運動会を開催し、子どもたちに楽しんでもらい交流を図る。

ika-15 Agosto Martes Makulimlim (8月15日 火曜日 曇り)

明日の打ち合わせのためSTHSを訪問。校長先生が学校創立の背景、歴史、教育理念などたっぷり時間をかけて事細かに説明して下さいました。笑顔でマシンガントークの校長先生、ひたすら耳を傾けあいづちを打つ私達、何時間たっただろう……

なんとかプログラムや準備する物の確認をすませ、ハンバーガーとお茶をいただき、無事に打ち合わせ終了。文化班と合流して出張所に戻り、全員で玉入れ用の玉や二人三脚用の紐などを用意。

ika-16 Agosto Miyerkules Maaraw (8月16日 水曜日 晴れ)

午前中は歓迎のセレモニーが行われた。お互いの学校紹介や国歌斉唱、フィリピンの伝統の踊りを鑑賞。その後、校内見学。授業風景を見たり、飛び入りで自己紹介をしたり、生徒とお話したり。

休憩時間に外で遊ぶ子どもたち…んっ！？なんかやけに幼いような気が…『あぁ～隣の小学校の生徒だよ。』と平然と言う先生。平和だなぁ…日本の学校の校門は鍵がかかって、セコムまでついているというのに。

外のテントには生徒が大勢、なんとそこはお菓子屋さん。揚げたてのバナナの春巻きめっちゃ美味しかったぁ～♪学校にお菓子屋さん、日本にもあったらいいのに。

腹が減っては戦はできぬ。ガッツリ昼食をたべた後、アスファルトの運動場には続々と子どもたちが集まり、開会式。

私達の自己紹介、坂〇くんの人気はアイドル並み。ジャニーさんもビックリ！誘われるままにフィリピンのダンスと一緒に踊ってノリノリ♪♪続いて運動会の主旨を説明すると、子どもたちは興味津々☆

さぁ、いよいよ運動会スタート！！私たちが計画した競技は、「玉入れ」「二人三脚」「大縄跳び」の3つ。今回行う競技は子どもたちにとって初めてのものばかり。

最初の種目は玉入れ。2チームに分けて対抗戦。長い棒がなく日本でやるように籠を高くできないので、椅子に立って籠を持ち、離れた所から投げ入れることに。籠にめがけて一生懸命投げ入れて、子ども達も一緒に大きな声で数を数える。勝ったほうのチームは大喜び☆運動会出だし絶好調！！

二種目は二人三脚リレー。二人組みで足を結ぶと、みんなフラフラ。しかし、初めこそぎこちなく歩いていたものの、肩を組んで1. 2. 1. 2…のカウントで足並みを揃えることを教えると、すぐにコツをつかみ走れるように。

最後の種目の大縄跳びは先生たちがチャレンジ。初めての競技に戸惑う先生、靴を脱いで気

合を入れるものの、1回も跳べず…。そんな姿をみて大喜びの生徒たち。

運動会の後は、STHSのバスケットボール部の学生チームとフィリピンプロジェクト男性陣チームとのバスケットボール試合。フィリピンでは大人気のバスケットボール。コート周りや校舎の廊下はこの世紀の対決を見守るギャラリーでいっぱい。

相手チームは本格的なユニホームでウォーミングアップ。完全に勢い負けの空気。しかし、ここは日本代表として一旗あげたいところ。背中には日の丸背負ってます。

試合結果は、歳のわりにはなかなかの健闘。みんな汗だく。最後はお互い握手を交わし、記念撮影。日比友好☆

サンタローサではよっぽど日本人が珍しいのか、それとも私たちを日本の芸能人とでも勘違いしているのか…最後は子ども達からのサイン攻め。ノートの切れ端やカードゲームの裏など至るところにサインを求められた。初めは有名人にでもなったようなノリで応じていたが、書いても書いてもどんどん増える子ども達と、我先にと伸びてくる手に収拾がつかなくなり若干困惑…。

楽しい時間はあっという間に過ぎるもので、大盛り上がりのうちに無事運動会終了。子どもたちも先生も私たちもみんな笑顔、笑顔、笑顔…やはりスポーツは国境・言葉を越えるのだと改めて実感。

今回のスポーツ交流を開催するにあたって、ご協力頂いたSTHSの先生方、出張所の方々、これに関わるすべての方に感謝致します。皆様のおかげで無事にプログラムを成功させることができました。スポーツ班の活動を通して、一から作り上げることの難しさを改めて実感し、同時に大きな達成感と子どもたちの嬉しそうな笑顔を得ることができました。本当にありがとうございました。



4. 文化班レポート

【文化班】竹平弥生子、半田美津子、池戸大津子、村田明彦

文化班は、フィリピンのサンタローサ市にある Central 2 Elementary School で小学生との文化交流の内容充実を図るために結成されました。メンバーは、臨床心理専攻4回生・竹平弥生子、英米語専攻4回生・半田美津子、3回生・池戸大津子、そして村田明彦の4人と決定。

6月頃から準備を進めていくにあたり、文化班の大きなテーマとなったのが「いかに日本の文化に親しんでもらうか」ということでした。僕たちはプロジェクトを通して、毎日フィリピンの文化に触れることができるが、小学生にとっては僕達と触れ合うたった数時間だけなので、少しでもわかりやすく、楽しい文化交流をもてるようにとミーティングを重ねました。

具体的な活動として決まったのは、折鶴の折り方を教え千羽鶴を作ること、紙芝居の作成、そして日本の小学生とフィリピンの小学生に描いてもらった絵の交換をするという3つでした。しかしこの3つ、僕達のみでやすやすと準備できるわけがなく、大勢の方々のお力添えがあって、なんとかやり遂げることが出来ました。

千羽鶴に関しては、材料の準備や道具の運搬が安易で行えることに加え、折り紙が比較的喜ばれるということもありすぐに決定しましたが、そこで難問が一つ。なぜ日本人が千羽鶴を折るのか？ということを知りやすく伝える必要がある、ということでした。そして知恵を出し合った結果、千羽鶴に関する紙芝居を作ってみてはどうかということになりました。物語性として、一人の少年の交通事故に際し、彼の一日も早い回復を願い、多くの友達たちが心を通わせて千羽鶴を折るというものです。その紙芝居を通して、千羽鶴とはなにかということをやさしく伝えることができるのではないかと考えました。

しかし、またも別の難問に直面しました。そのストーリーをどうやって伝えるのか？ということです。フィリピンでは歴史背景から英語が公共の言語として広まっていますが、交流の相手は小学生です。子どもたちの集中力を維持しつつ、スッと心に入る手段…壁にぶち当たったかに思いましたが、天理教海外部のタガログ語担当の方と、TLI(天理教語学院)の留学生の方々に翻訳を手助けして頂けることになり、僕たちの紙芝居の翻訳、またアドバイスを頂くことができました。また現地滞在中にはホストファミリーの方々に発音の練習につきあっていただき、みんなで感情を込めて読む練習もすることができました。

絵の交換は、JICA 国際協力推進員、中島邦公さんのご協力を頂き、天理小学校と桜井市立織田小学校から絵を提供して頂きました。そしてさらに幸運なことに、2004年に和歌山県でクレヨン工場を運営されていた山下ご夫妻が亡くなられたので、その娘さんである宮本裕美さんが残った大量のクレヨンをご寄贈くださり、みんなで数本ずつ袋に分けて、フィリピンの小学生にプレゼントすることができました。

こうしてそれぞれ活動の準備は整い、現地に向かうことになりました。8月15日に Central 2 Elementary School で打ち合わせを行い、17日に交流会本番を迎えたのである。プロジェクトメンバーの即席の歌や、小学生の歓迎のダンスを交え楽しく時がすぎていきました。千羽鶴は、紙芝居の効果に加えメンバーが身振り手振りをまじえ折り方を教えていき、子どもたち皆熱心に取り組んでくれました。またクレヨンの色彩を上手に用いて、明るく躍動感のあるいきいきとした絵を描いてくれた子どもたちの姿がとても印象的でした。

この企画が、どれだけ文化交流となったかははっきりとはわかりませんが、あの子どもたちの笑顔は今もずっと心に残っており、達成感があります。

交流会の時の写真はフィリピン滞在日記の4日目をご覧ください。

5、ホームステイレポート

ホームステイ体験“こころ”を感じて

報告 椋野 和子

何も分からないまま、長年の夢であった海外へ目を向けることが出来るよこびを持って参加した。帰国して、このプロジェクトは多くの人々のお力によって支えられている意義深いものであることを知った。自らの無知と出来の悪さに、恥ずかしい思いの今を過ごしている。

フィリピン一般的な家庭では、家族のために、誰か一人は家を離れ出稼ぎにでていることが多い。そういう家族が私たちを受け入れてくださったという「こころ」と、貧しいけれど比較的治安が良く、人々が温かい“だからこそ、ここに”とサンタローサの地を選んでくださった先生の「こころ」と、ホストファミリーとなつていただくために、バランガイ（フィリピンの最小行政地区）の協力を得て、何度も足を運んで了解を得て下さり、滞在中も、思いっきり、お世話になった東本大教会サンタローサ出張所の先生方の「こころ」を、決して忘れてはいけない。すばらしい教学協働の姿であった。

ホームステイの体験を、文字にすることは私にとっては、つらいものがある。言語的コミュニケーションはゼロに等しく、殆ど非言語的コミュニケーションで通したからだ。

一緒に行動した学生は、家族とともに、バドミントンを楽しんだり、夜食を食べに行ったり、みんなフレンドリーで親切な人々で、嬉しく、感謝しているとの感想が殆どである。中には貴重な体験をした学生もいる。フィリピンの葬儀である。マーライといって日本でいえば通夜みたいなものだ。人々はおしゃべり、カラオケをしながら一週間寝ずの番をする。睡眠不足と疲れで体調を崩したが、かえって家族の温かさを感じるようになった。

私のエピソードのいくつかは、一笑に付していただきたい。*ホームステイ初日の深夜、トイレに行こうとドアを開けると、部屋の前に見知らぬ男性がソファーに横たわっている。両者びっくりの対面、翌朝この家の主と聞き、更に驚く。*事情で親のいない孫と父の世話をしながらも日本人の世話まで気持ちよく引き受けてくれた同年代の「母」は毎朝大忙し、孫を学校まで送り、その後大きな“娘”をトライシクル（乗り物）で出張所まで送る。*隣近所が親戚で、たくさん子どもたちと一緒に過ごした朝の時間は貴重な宝物。通じればもっと仲良くなれたのに。*一緒に作ろうとお好み焼き一式を持参した。時間がなくて説明だけになったが、作っていただけたらどうか。*早朝からの一時間のお祈りは「マザーテレサ」と同じカトリック教徒が行う瞑想の時間であった、と後から知った。*「孫」たちは、帰りを待っていてくれて、リングで敷物をつくり、マジックをして楽しんだ。翌朝、子どもたちは入れ替わり立ち代り、窓の外から、まだかまだかとお祈りが待ちきれない様子で覗き込んでいた。*フィリピンの食事は美味しくても、味わう余裕がなくて、胸がいっぱいで過ぎ行く毎日だった。*排世の習慣、お尋ねしたけれど、落ち着いて腰を下ろしているものか、未だに理解できていない。

フィリピンの人の“まごころ”に触れ、十分に思いが伝わらないことを悔い、申し訳なさが残っている。『84歳英語イギリスひとり旅』清川妙著の主人公のように53歳で英会話を始め、65歳から一人旅を始めた。今も現役で旅をしている。このように私もなりたい。ゆっくり10年計画でも立てようかと考えている今日この頃である。

6、“Home of Joy”レポート

Mother Teresa Mission in the Philippines

報告 竹平弥生子、三島千佳

今回私たちはマザーテレサミッションの一貫として活動している施設でボランティア活動をさせていただきました。カトリックに限らず、どんな宗教の人でもボランティアをさせていただきます。プライバシーなどの問題から、今回の訪問では写真撮影は一切禁止されました。

施設には脳に障害をもつ子どもたちが暮らしています。たくさんの方のような方たちがお世話をしていますが、シスター以外の人たちはすべてボランティアです。そして施設ではお金による援助ではなく物資でということわりのもと、私たちは簡単な食事を持って行きました。

彼らの中には脳に障害があるため、一人で食事をするこゝろすらできない子どもたちもいます。寝返りをうつのが精一杯で、突然泣き出す子や、廊下をうろうろする子どもとさまざまな子どもが暮らしています。

そんな子どもたちの遊び相手や食事補助を目的とした今回の訪問だったのですが、私たちは最初自分がどう接していいかということに戸惑い、一瞬立ち止まってしまいました。けれど、一人一人の目線で話しかけてみると、たまに笑顔を見せてくれたり、手で探るように触れてきたり、声を出したりして応えてくれるのです。

食事の時間になりやってきたシスターたちを見て私は驚きました。私のイメージではシスターはもっと厳しそうなお人を想像していましたが、明るくいつもニコニコしていました。説明してくれたシスターによると、世界中のシスターたちがこの施設で働いているそうです。実際にはお会いできませんでしたが、道路を挟んで向かい側の老人向け施設には日本人のシスターが働いているそうです。

ふと横に目をやると、OL風の綺麗なお姉さんがボランティアにこられていました。その方は地元の銀行で働く女性で、週末は毎週ボランティアにこられるそうです。そして、毎週決まった子どもの世話をするとおっしゃっていました。みると、さっきまで泣きながら不安そうに歩き回っていた女の子がちょこんと彼女のひざに座りご飯を食べていました。「この子達は孤児で、母親の愛情が必要な。」とその女性はおっしゃっていました。そうです。この施設で暮らす子どもたちは孤児で両親がいません。子どもにとって母親の存在がとても大事なことは、世界中どんな子どもでも同じです。そこで私ははっとしました。募金をしたり物を送ったりと、ボランティアの形はさまざまです。しかし、安心して甘えられる母親の存在となることはなかなかできないことではないでしょうか。週末の貴重な休みを赤の他人である子どもの面倒を見るために費やす。そんな彼女をみてフィリピンの人たちのホスピタリティの高さを感じました。



第三部(資料編)

天理教の用語説明

このページでは、寄稿文や感想文などの中でよく使われた天理教用語を簡単に説明しています。天理大学には天理教信者でない学生も多く、この文集を読むときの手助けになればと思います。『天理教用語の基礎知識』（天理教道友社）2002年から引用しました。

「親神様」（おやがみさま）

神名を天理王命（てんりおうのみこと）という。教祖は、親神様のことを人々によく分からせるため、「神」「月日」「を(お)や」と、三つの段階を踏まえて教えられた。まず、人間を含めこの世のすべてを創造された「元の神」であり、創造以来変わることなく守護されている「実の神」であると。次に、一刻の休みもなくすべてのものに光と恵みを与える「月日」こそ、天における親神様の姿であると。さらに、もっと身近な、何事でも打ち明けてすぐることのできる「親」であると。

「教祖」（おやさま）

天理教の教祖、中山みき様のこと。「おやさま」とお呼びしている。

「ぢば」

教会本部神殿の中央、「かんろだい」と呼ばれる台の据えられている地点。親神様が人間・世界を創造される時、最初に人間を宿し込まれたところで、ここに親神様がお鎮まりになっている。「ぢば」はすべての人間のふるさとであるので、ここに参ることを「ぢば」に参ることを「ぢばに帰る」、「おぢば帰り」という。周辺を「親里」と呼んでいる。

「陽気ぐらし」（ようきぐらし）

心の底からわき出る陽気につつまれた明るい暮らし。天理教信仰者の目標とする暮らしであり、親神様が人間を創造された目的でもある。

「かしもの・かりもの」

私たちは、からだは自分の思うとおりに動くものだと思っています。しかし、私たちがからだを自由に使うことができるのも、親神様が体内に入り込んで、限りないご守護を下されているからです。

たとえば、朝、目が覚めるのも、食べたものが血や肉になるのも、呼吸ひとつにしても、自分で意識してやっているのではありません。病気になって、熱が一、二度上がっただけで、自由に動かせるはずのからだもままなくなります。

このことを「身はかしもの・かりもの」と教えられます。からだは、親神様から人間への“貸しもの”、人間の側から言えば“借りもの”だということです。

親神様は、からだは人間に貸しておられますが、心だけは「わがもの」として、自由に使うことを許されました。だから、目、耳、鼻、口、両手、両足、生殖器官、これら九つの道具は、自分の心で思うとおりに使うこともできるのです。

自分の思いどおりに使えるといっても、借りたものであるからには、貸し主の思いに添って使うことが大切です。その思いとは“陽気ぐらし”。

『おさしづ』に、「めんめん楽しんで、後々の者苦しますようでは、ほんとの陽気とは言えん」とあります。自分の楽しみのためでなく、人のために使うのが、借りもののからだ（道具）の正しい使い方と言えるでしょう。

「ひのきしん」

「ひのきしん」とは、漢字を当てれば「日の寄進」。寄進とは、もともと社寺などに財物を寄付することですが、教祖（おやさま）は、誰でも日々に行える親神様（おやがみさま）にささげる行いとして、「ひのきしん」を教えられました。無償の行為ということでは、ボランティアと同じですが、親神様のご守護があるからこそ、からだを動かすことができるのだという、喜び勇んだ心が込められています。この感謝の心から生まれる行動は、すべて「ひのきしん」です。姿形ではなく、そこに込められた心が大切なのです。

「にをいがけ」(においがけ)

親神様の思いをまだ知らない人に伝え、信仰の道にいざなうことです。信仰の喜びから発散する匂いをかけるという意味です。

「おさづけ」

病だすけの手段として渡される授けのもの。「おさづけの理」を頂いたものが、病で苦しんでいる人に真実の心を含めてこの理を取り次げば、心次第でどんな悩みも取り除いていただけるということです。

「おたすけ」

病気や事情で苦しんでいる人に、おさづけを取り次いだり、話を取り次いで、たすかる方向へ導くことです。

「おつとめ」

教祖が、世界中の人間をたすける方法として教えられた、天理教独自の祭儀。本づとめは「かぐらづとめ」と「てをどり」からなる。かぐらづとめは「ぢば」でしかつとめられない。

「お願いづとめ」

病気や事情のご守護を願ってつとめるおつとめ。

「朝づとめ・夕づとめ」

朝には、新しい一日を迎えさせていただいたお礼と、今日一日の無事をお願いし、夕には、一日を結構にお連れ通りいただいたお礼と、明日への祈りをこめてつとめるおつとめ。教会本部はもちろん、教会や布教所、神様をまつる信者家庭でもつとめられる。

天理大学「国際参加プロジェクト」

アジアへの貢献を考える

学生座談会

天理大学の国際参加プロジェクトは、社会的な関心と成長の機会を学生の海外活動に提供することを目的として、国際参加プロジェクトを推進している。このプロジェクトは、国際参加プロジェクトを通じて、学生が海外での活動を通じて、国際社会に貢献できることを目指している。また、国際参加プロジェクトを通じて、学生が海外での活動を通じて、国際社会に貢献できることを目指している。



村田 明彦君
異文化を受け入れて
異文化を受け入れることは、国際社会に貢献するための重要なステップです。村田君は、海外での活動を通じて、異文化を理解し、受け入れることで、国際社会に貢献していることを話しています。

中島 邦公氏
インタビュー
JICA大阪国際協力推進員
中島氏は、JICA大阪国際協力推進員として、国際協力に貢献しています。インタビューの中で、国際協力の重要性と、国際社会に貢献するための方法について話しています。

周囲の人にもっと目を



池戸 大津子さん

◆学生の海外プロジェクト
池戸さんは、海外プロジェクトを通じて、国際社会に貢献していることを話しています。また、周囲の人にもっと目を向けることで、国際社会に貢献できることを目指していることを話しています。

◆現地での活動
池戸さんは、現地での活動を通じて、国際社会に貢献していることを話しています。また、現地での活動を通じて、国際社会に貢献できることを目指していることを話しています。

「知らない」もつたない



大脇 千絢さん

◆参加したのち
大脇さんは、参加したのち、国際社会に貢献していることを話しています。また、参加したのち、国際社会に貢献できることを目指していることを話しています。

インドネシアとフィリピンで活動 国際理解の輪を広げたい

「心に余裕」援助の一步

◆心の余裕
国際理解の輪を広げたいという思いから、インドネシアとフィリピンで活動している学生たちが、心に余裕を持つことで、援助の一步を踏み出していることを話しています。

◆心の余裕
国際理解の輪を広げたいという思いから、インドネシアとフィリピンで活動している学生たちが、心に余裕を持つことで、援助の一步を踏み出していることを話しています。

◆心の余裕
国際理解の輪を広げたいという思いから、インドネシアとフィリピンで活動している学生たちが、心に余裕を持つことで、援助の一步を踏み出していることを話しています。

◆心の余裕
国際理解の輪を広げたいという思いから、インドネシアとフィリピンで活動している学生たちが、心に余裕を持つことで、援助の一步を踏み出していることを話しています。

◆心の余裕
国際理解の輪を広げたいという思いから、インドネシアとフィリピンで活動している学生たちが、心に余裕を持つことで、援助の一步を踏み出していることを話しています。

天理大学

天理大学入試部

〒632-8610 奈良県天理市杣之内町1050
(URL) tenri-u.jp (FAX) 0743-63-7368
(TEL) 0743-62-2164 (E-mail) nyushi@stc.tenri-u.ac.jp

入試科目	試験時間	受験料	合格発表	入学手続
一般入試	H18/11/15(水) 11/16(木)	H18/11/21(水)	H18/11/25(日)	H18/12/15(水)
推薦入試	H18/11/15(水)	H18/11/21(水)	H18/11/25(日)	H18/12/15(水)
短期入試	H18/11/15(水)	H18/11/21(水)	H18/11/25(日)	H18/12/15(水)
入学手続	H18/12/15(水)	H18/12/21(水)	H18/12/25(日)	H19/1/15(水)

募集期間 10月19日(木) 16:30~18:30

10月19日(木) 天理大学 池之内

10月16日(月) 18:30~20:30 天理大学 大隈キャンパスホールの7階

10月29日(日) 10:30~12:30 奈良県文化会館 2階

海を越えた絵の交換

フィリピンとインドネシア 天理小で贈呈式

天理 天理市杣之内町の私立天理小(後藤 藤典郎校長、児童数598人)で25日、フィリピンとインドネシアの子どもたちから贈られた絵の贈呈式があった。同小の児童らは、天理大が今夏行った国際理解教育支援活動「海を越えた絵の交換」に参加。同大の学生らがフィリピン

とインドネシアの子ども支援活動に赴く際、授業中描いた絵を託し、現地

の子どもたちの絵と交換交流をした。

今日は、活動から帰国した学生ら6人が、持ち帰った絵とともに同小を訪問。児童らに絵を手渡した後、現地で撮影した写真をスライドを使って説明した。

児童らは、映し出されるフィリピンとインドネシアの子どもたちや日本とは異なる町の様子に興味深そうな表情。スライドを食い入るように見つめながら「かわいいなあ」「いつか行ってみたい」と歓声を上げていた。

【宮間俊樹】



フィリピンとインドネシアの子どもたちから贈られた絵を手にする天理小の児童と天理大の学生—天理市の天理小で

毎日新聞 10/29

布留からの発信

—まことの信条教育を目指して—

発行・天理小学校

立教169年(H18)

10月27日(金) No.58

担当 校長 後藤

インドネシアとフィリピンの報告 <天理大学の国際協力活動>

10月25日(水)臨時の全校朝会を行いました。天理大学の学生さんが、建学の精神に基づく「他者への献身」を国際的な場で実践することの一つとして、インドネシアとフィリピンを訪問し、さまざまな形で援助と交流をしてこられました。その際に、本校児童の絵画を待参して頂きました。そのお返しとして、両国の紹介と訪問先児童の絵画の贈呈が行われました。

スクリーンに、インドネシア地図が映し出されました。あのスマトラ沖地震津波で大きな被害を受けたところです。天理大学の方はまず孤児院を訪問しました。60人ほどの孤児たちと、日本語やインドネシア語で歌の交流をした後、クレヨンをプレゼントしそれで絵を描いてもらったそうです。

ニアス島のモアウォ小学校は、天理大学のニアス島復興支援委員会の尽力により、多くの募金をもとに再建されました。校舎の仕上げ段階で、ペンキ塗りや花壇造りを手伝ったそうです。ですから、この度の訪問は、双方の思いが深く感動的なものだったということです。

フィリピンを訪問した学生さんからは、タガログ語(母国語)の紹介から始まり、現地の生活の様子を映像で披露していただきました。本校児童の絵画とクレヨン及び折り紙をプレゼントし和やかに交流している様子が伺えました。

毎日新聞、奈良新聞、奈良テレビが取材に来ていました。世間の関心もかなり高いことが伺えました。絵画だけではなく、児童の交流もできればよいなあと思いました。



贈られた絵画と現地の様子を伝える写真を手にする天理大生と児童会役員

編集後記

まずは編集長、副編集長からのコメントです。3回生3人のチームワークはなかなかのものでしたね♪

やっとできあがりしました文集！！（涙）みなさん、本当に本当にありがとうございました！！人に頼め！！といつも指導して下さった澤山先生。頼りない私を最後まで支えて下さった先輩方。心の広い井上くん。仕事が速い村田くん。この文集を見るたびフィリピンを思い出し、みなさんを思い出します。協力して下さったすべての方にお礼申し上げます。本当にありがとうございました。（編集長 3回生・池戸、写真中央）

2回目のフィリピンでの活動も、とても有意義で素晴らしい体験ができました。この素晴らしい体験を文集という形にでき嬉しく思っています。（副編集長 3回生・井上、写真右）

編集するにあたり、フィリピンで活動して得られた経験を自分たちの中だけで振り返って終わらせるのではなく、これを通して読まれた方になんらかの影響を与えることができたらと考えていました。たくさんの方のお力添えにより、僕達のフィリピンでの活動が冊子という形で残ることとなり、非常に嬉しくまたありがたく思います。（副編集長 3回生・村田、写真左）



以下の写真はある日の編集作業の様子です。



池戸編集長自らが原稿作成に。ブラインドタッチがとても軽快でしたね。竹平・水谷コンビは原稿のチェック中。



素晴らしい手料理ですね。椋野さんには、プロジェクトの事前研修、文集の編集作業中にも手料理の差し入れを数多くしてくださいました。



今回の「フィリピン・プロジェクト 06」から社会人の方からの参加もあり、多方面からのパワーが大学にも加わってきています。椋野さんには、上の写真に見られるようなすごいご馳走を何度も私たち学生に振舞っていただき、学生たちのお母さんのような存在でした♪千歳さんにも学生を影から大きく支えていただきました。編集面でも貴重なアドバイスを多くいただき、本当にありがとうございました♪

以下は参加者からこの文集に寄せるコメントです。

自分が書くべきところ以外になかなか関わることができず、申し訳ない気持ちと皆様の頑張りに感謝です。2度に渡って「国際参加プロジェクト」に参加でき、自分自身が成長できたことが多くあります。またこれを読んで興味を持つ人が増えることを願っています。
(4回生・坂上)

文集の編集をあまりお手伝いできず、すみませんでした。けど、たまに手伝いに行った時の雰囲気、なんとなく好きでした。そんな雰囲気の中みんながんばってくれたので、いい文集ができたと思います。お疲れ様、ありがと〜。(4回生・竹平)

文集完成おめでとうございます！！編集では全然お役に立てなくてすみません。みなさんのおかげでとってもステキな文集ができあがりました☆
さあ、今度こそ文集完成記念パーティーだっ♪♪(4回生・畑)

文集作成をあまり手伝うことが出来なくて、本当に申し訳ありませんでした…。でも文集を作る時に写真などを見たり、みんなと話をしたりすることで、フィリピンで感じたいろいろなことを思い出すことができ、とても楽しかったです！(4回生・半田)

こうして文集を作っていく中で、フィリピンにいたことが夢ではなかったんだと実感しました。ありがとうございました。(4回生・三島)

文集作りは、もうすぐ完成できるなー、と思っただけからが非常に長かったように感じます。チェックする度に、改善点、日本語のミス、打ち間違いなど、どんどん見つかります。文集作りでも粘り強い根気が必要ですね。みなさんありがとうございました。(4回生・水谷)

報告書作成に尽力頂いた皆さん、お疲れ様でした。フィリピンでの体験はもとより、フィリピンを通じて出会った仲間は、私にとっての大切な宝物です。本当に皆さんありがとうございました。(千歳)

編集のために、ご苦労下さった皆さんの仲間に入れていただけるとは大変うれしいです。皆さんと時間が合わずに、お手伝い出来ることは少なかったですが、集まりの時には何にか喜んでいただけるようにと、作ったおやつはいかがだったでしょうか？スイーツのパワーも皆さんのお疲れを取るために、少しはお役に立てたでしょうか。こんな素晴らしい文集になったのもみんなで力を合わせてできたからだと思います。(椋野)

自分たちで文集を編集してみると、その大変さ、苦労がたいへんよく分かりました。日本語の練習にもおおいになり、社会人になる前の貴重な経験になったと思います。この文集が今後このプロジェクトを続けていく後輩たちの何かの役に立てば幸いです。来年からも続いていく天理大学の「国際参加プロジェクト」のさらなる発展、充実を祈って。みなさま、ご協力たいへんありがとうございました♪

天理大学「フィリピン・プロジェクト06」報告書

発行： 2007年3月23日

編集： 「フィリピン・プロジェクト06」参加者

発行所： 天理大学地域文化研究センター

〒632-8510 奈良県天理市杣之内町1050

TEL 0743-63-9077

icrs@sta.tenri.ac.jp

印刷所： 天理時報社

